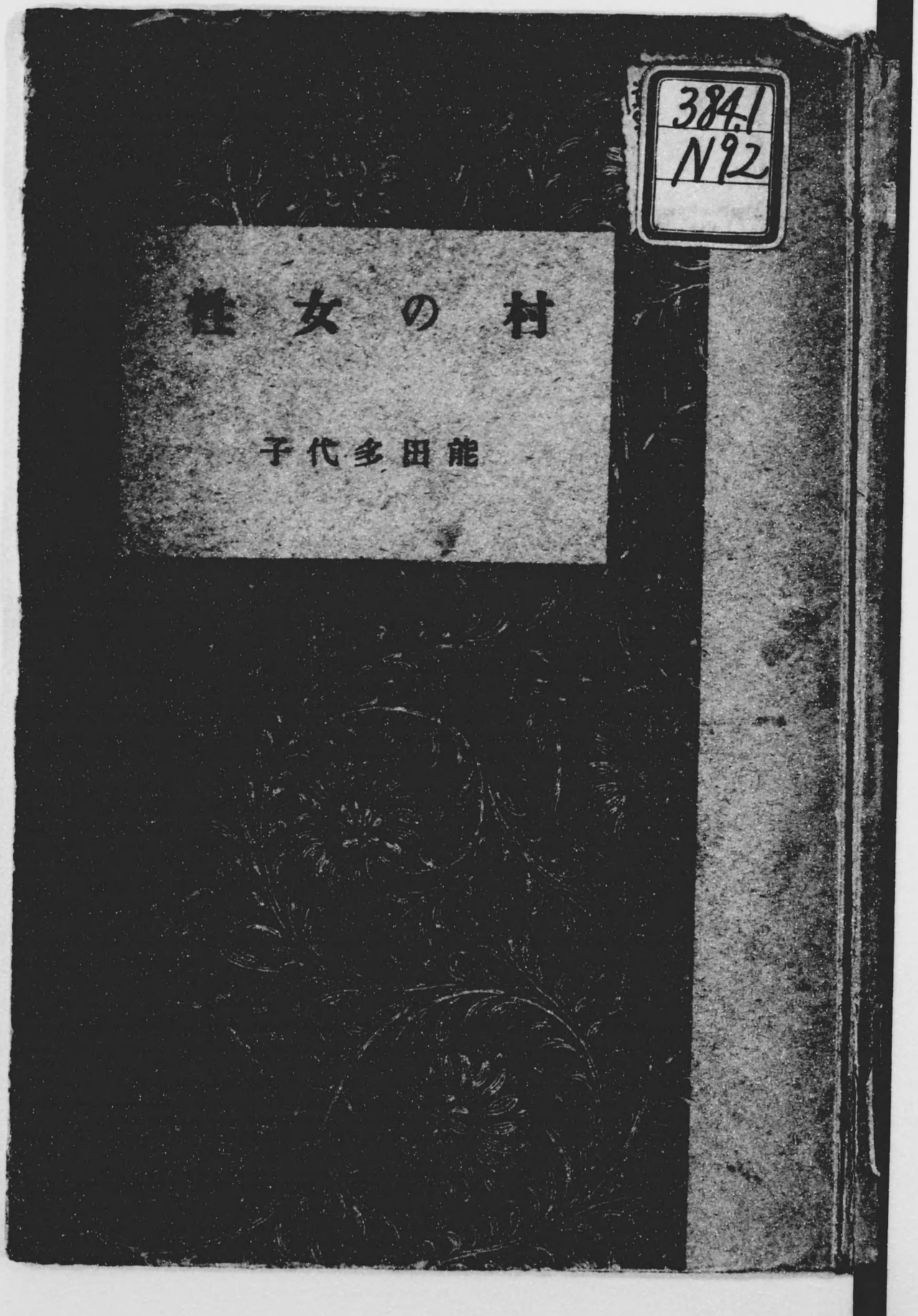


0054092000

0054092-000

３８４．１－Ｎ９２ウ

村の女性

能田多代子・著

三国書房

昭和１８

AIB

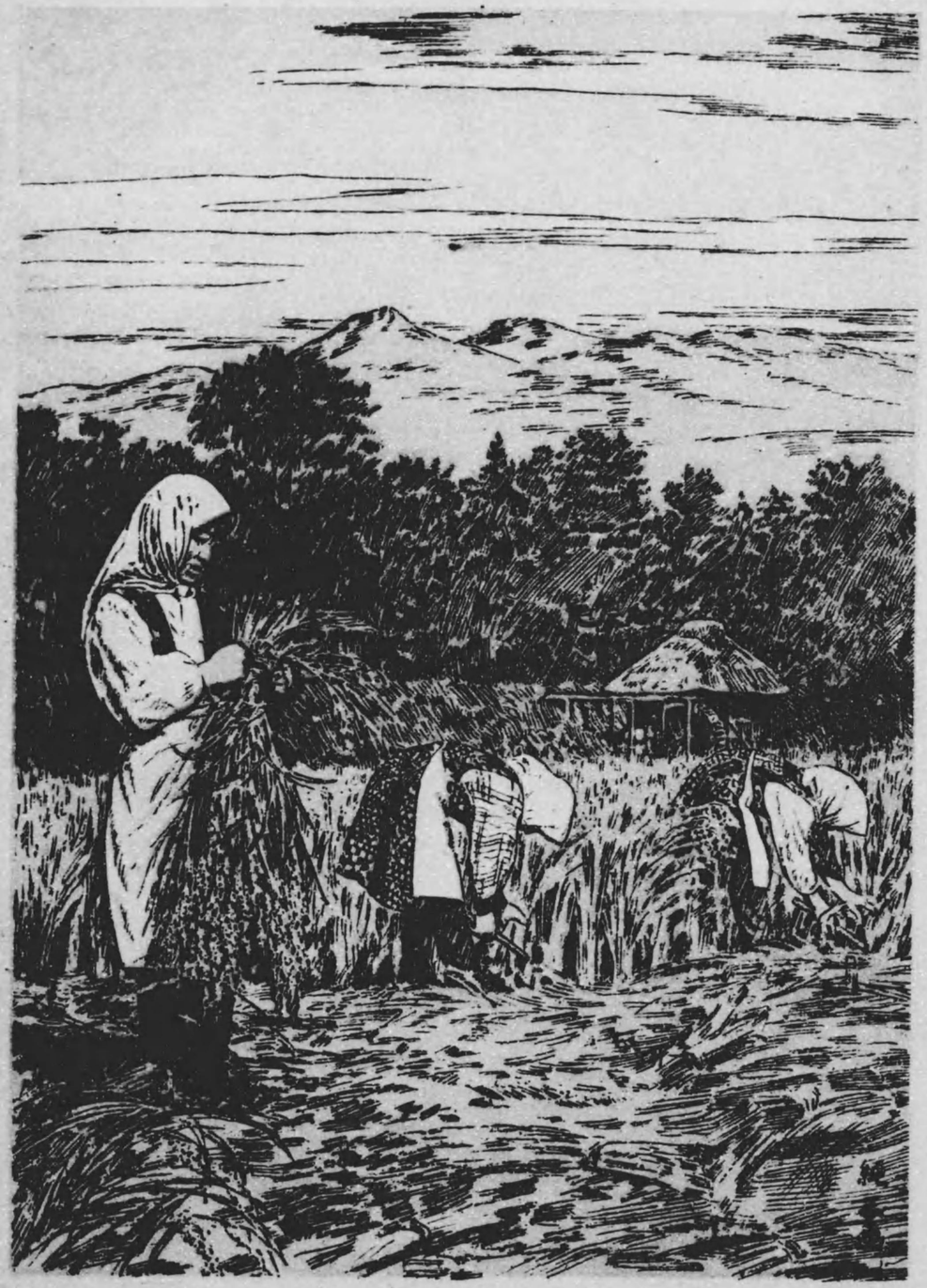
ト工9R-73

384.1
N92

能田多代子著

村の女性

三國書房一版



945
122

序

この一巻の文章の中では、特に農村採訪記以下の諸篇から、樂しい印象を私は受けて居る。是まで一ぺんも採訪といふことの、無かつた村々であるといふだけなら他にも例は多いが、年頃同情をもつ著者のやうな人が、村に生れた若い女性を道案内につれて、ちやうど野山は紅葉尾花、里は苅入れ時の活き〳〵とした秋なかばに、澤を渡り、長根の路を登り降り、次々とゆかりの家々を訪れて行くといふ情景は珍らしいもので、單なる學問の道行振といふ以上に、何か新らしい文化映畫でも見るやうな、意外な悦びを人に與へて居る。おまけに其中には程よいところ〳〵に、逢つて話をした老人や女房たちの、素朴な思ひ入つた面ざしと物いひが、大寫しの

やうにして挿み込んであるなどは、以前は言ふも及ばず、後にも恐らくはさう多くは類があるまい。曾ては斯ういふ人生の現實も片隅に有つたといふことを、しみじみと考へて見る人の爲に、是はまことに親切な贈りものであつた。失禮な話かも知れぬが、企てゝは却つてこの様には書けなかつたらう。すなほな物を感じる力といふものが、案外に大きな仕事をするといふことを、改めて私も經驗したのである。

今までこの五戸といふ地方へ、足を踏入れたことの無い我々にも、是で一通りは土地に住む人の氣もちが、窺はれたやうな感じがするのだが、しかし細かく見て行くと、まだ色々の註釋の欲しい點が見つかつて來る。もしくは唯すら〳〵と通り過ぎてしまふものゝ中に、立ちどまつて更によく見て置くべきものが、殘つて居るやうなごり惜しさが多い。それで折にふれてそちこちの雜誌に、書いて置かれた同じ土地の生活誌のやうなものを、出來るだけ數多く拾ひ出して、一冊の本に纏めて見てはどうかといふことを、勸めたのも實は私であつた。斯ういふわざとでない幾つかの敍述を繋ぎ合せ、自然の綜合によつて徐ろに眞相に近づいて行くといふことは、讀書家にとつても樂しみな仕事であり、又最も穩當且つ公平な判斷を、導いて來る道でもあらうかと思つたからである。最近の歷史に於ては、廣い全國の中でも東北は殊に、その將來の展開に就て、多くの外部の人たちの關心を引付けて居るが、其割合には近よつて詳しく知らうとする者が少なかつた爲に、今まではとかく簡單な概念によつて、一括した推論が下されやすかつた。さういふ場合にいつも迷惑をするのは、五戸鄕などのやうに比較的早く開け、しかも何等かの事情によつて、その古い頃の文化組織から、そつくり脫け出して來ることが出來ずに居る土地である。勿論さう謂つた土地も少なくなつて行く一方で、その變遷經過の究め難いことが、言はゞ近頃の東北問題を六つかしいものにして居たのである。龍田多代子さん

の生活描寫が、單なる昔を愛する者の心ゆかしであり、又はたゞ御國自慢の一種であつたとしても、なほその數々の言葉の下に、隱れて流るゝものを掬み味はつて見なければならぬ。ましてこの人は久しく民間傳承の會に携はつて、既に我々の知識の渇きを知つて居る。是が東北の理解の上に、新たに若干のものを寄與することは、素よりその志であり、さうして又目的はほゞ達して居るやうにも思ふ。

しかし自分にも經驗のあることだが、書物の實際の效果といふものは、書いて居る當人には豫測し得られるもので無い。寧ろ後々の良い讀者によつて、時過ぎてから新たに發見せられるものが、幾つか殘つて居る位なのをしあはせとしなければならぬ。この本の中にももう少し說明のあつてよい處、或は五戸といふ鄉土の特色がや〻知られて居たならば、更に一段と興味が深かつたらうと、思はれるふしも無いとは言へぬが、そんなことに氣をもんでうつかりと口を出すと、却つて提灯持ちの

嫌ひがあつて、何か新らしいものを此中から見つけ出さうとする熱心を、殺ぐことになつてもつまらない。それよりも將來この女性叢書のやうな事業に參加して、一つの方面を分擔して見ようといふ志のある人たちに、少しは役に立ちさうな二三の心付きを、聊か無遠慮に書添へて置いた方がよいかと思ふ。その一つとしては女の修養といふこと、是はやつぱり少女の頃から、おとなに成つて行くまでの間に身に附いたものが、深く力强く生涯を指導して行くやうに、最初から定まつて居るのでは無いかといふことが感しられる。能田さんは國でも決して古い型の女性で無く、それから東京に出て來てさま〴〵の世相を學んだ上に、更に九州の一角に移り住んで、最も思ひ出の深い結婚生活を送つて居られた。主人はすぐれた民俗學の學徒であつて、あらゆる生活の觀察をするのに誰よりも自由な境遇に居つた人である。しかも奥州五戸鄉の生活を說く段になると、私たちが期待して居たやうな南北の比較

が、まだちつとでも試みられては居ないのである。恐らくは此次に肥後の玉名郡の見聞記を書かうとする場合に、それが想像以上に豊富に出て來るのかも知れぬが、ともかくも婦人としては至つて得難い經歷、國の兩端の、しかも農民の常の日の生活を熱知して居るといふ特長を、こゝでは十分に利用することが出來なかつたのは、必ずしも同情の深さ淺さにはよらず、寧ろ常識とも名づけらるべき體驗の濃さ淡さ、もしくは成長の盛りの日の印象といふものが、たとへば入墨などの如く、身になり肉になつてしまつた結果であらう。教育者に聞かせると是は大きな參考になるが、そんなことまでは我々の掛りで無い。それよりも日本の昔の心を尋ねて行くのに、この點を各自の足場とし、從つて又やたらにめい〳〵の常識に照して、異なる境遇に養はれた者の心持ちを、批判しようとする傾きを、戒めなければならぬことだけは考へられるのである。

二

さうすると話は結局、どういふ人に向つてするつもりで書くのが、一ばん效果があるかといふことが第二段の問題になつて來る。この本には限らず、女の人の書かれるものにはいつも其惱みが窺はれ、女で無いけれども自分なども始終苦しんで居る。理屈は勝手なものだから、一人も聽く人が無いと思つてもしやべれるが、一たび見た感じたといふ事實を談る段になると、是には立聽き傍聽といふ樣な、知らぬ聽手までが豫想せられるのである。この能田さんの筆の跡にも、處々に書きにくかつたらうと思はれる部分が見られるのは、私には無理も無いと同感せられる。一方には殆と何も知つて居ない奥州以外の讀者があつて、さういふ人にもうんと聽かせたし、他の一方には故郷の知人の、そんな當り前なことをと思つて居るのが、背後には又多く控へて居るのである。是をどうしたら双方共に、讀んでほゝ笑むやうな樂しい滿足を與へられようかといふことは、言はず語らずの間に誰でも迷うて居

る。後來も必ず問題になるだらうが、是は私などは自分に聽かせて居るやうに、もしくは愛する人々が眼の前に居て耳を傾けて居るやうに、空想を描いて語るより他は無いと思つて居る。昔の家刀自の膝の傍に寄つて來た者は、知らぬやうに見えてもまだ色々の事を知つて居た。從つて話は簡單でもよく、又寧ろ短く強い言葉で、要約してやつた方が效果が多かつたのである。是に反して現在の知るべき人々は、大抵は成長期の境遇を異にし、斯んな事すら知らなかつたのかと、驚くやうな場合が常に多い。ましてや其愛情を更に推し擴げて、百年二百年の後代に及ぼすことを考へると、冗長は無論いけないが、少なくともさきで判るまいと思ふことを書き殘すべきで無い。背後の少數の書かれて居る人たちの思はくなどは、斯ういふ意味に於てなだめて置けばよい。卽ち彼等も亦我々の筆を通して、始めて後世に向つて語ることが出來るのである。

それから今一つ、是まで自分が知り拔いて居ると思ふことでも、改めて人に語らうとすると、又新たなる疑問の種になることが屢〻ある。私たちはそれを事實と學問との繫ぎと考へて、出來る限り粗末にせぬやうにして居るが、馴れないうちは是が氣になつて、思ふやうに話を進められなかつた經驗を持つて居る。この世に理由の無いことの存在しよう筈は無いのだが、それがまだ明かになつて居ない場合は至つて多い。どうしてさういふ事實が有るだらうかといふ疑ひは、言葉通りに受取つてこちらも共々に、考へて見るべきものであるが、女の人たちにはそれを有り得ないことだ、又は何かのまちかひであらうと、言はれたのと同じに取つて氣にかける人が折々はあり、私などもよほど受答へに用心をして居る。能田さんはもう馴れて居るので、決してさういふことには頓着はしないが、それでも時々は事實の前に立留まつて、果して說明が無くても人が之を信ずるだらうかと、自問自答するだけの

心づかひだけは持つて居られる。さういふ場合に時々は私の名を引いて、柳田も斯う謂つて居るからと、御手子に喚ばれて居るのは迷惑な話であつた。私は前にも述べた通り、まだ五戸郷には足を入れたことが無く、今まで他の方面の僅かな見聞に據つて、斯ういふわけでは無いかと推定して居ることが、ひつくり返りはせぬかとびく〳〵として居る者である。爰の又一つの新らしい事實が、この推定を支へてくれゝば仕合せといふまでゝ、それを解説する力などは持つて居る筈が無いのである。だから此點は斯ういふわけかも知れぬと、謂つて居る人が有るといふ程度に、引下げて讀んで貰はぬと甚で困るのである。しかしさう謂つて居るうちにも追々と探訪が進み、殊に東北のあちこちの土地から、斯ういふ精密な且つ同情に富んだ記載が、更に三つも五つも出て來ることになつて、それが偶然で無い。數々の一致を示すやうになつたら、そんなつまらぬ苦勞はする必要も無くなつて來るにちがひない。どうかさういふ證據を安々と利用して、村々の女性の隱れた功積が、誰にでも考へられるやうになつて後、改めてもう一度、この先發者の御手本に禮をいふ時代が、早く到來せんことを私も切に念じて居る。

昭和十八年四月

柳田國男

自序

少し變つたことを申上げるやうでありますが、私の鄉里青森縣五戸地方には、「學（がく）がない」といふ言葉が行はれてゐます。主に人をたしなめる言葉で、よく母などが我が子に對して、日常の物事や、常識的な知識などに缺けてゐる場合に、相手を幾分卑下した氣持ちで使はれてゐます。其意は、見聞が狹く聰明でないといふ意味のやうに思はれます。「學」は國語では「まなぶ」ときいてをりますから、「學」といふ語は、文字が日本に移入されてから後の言葉なのかも知れませんが、私にはよく解りません。たゞ村々には後に申しますやうに思はれます。

又「學問」といふ言葉は、小さい時から聞いたのですが、其語感は何かしら標を正して机に向ひ、讀み書き算盤を習ふ業で、以前は村々の間では限られた人達の修得することだと、思はれ勝ちでありました。又後に教育といふ言葉を覺えるやうになつてからは、それは學校といふ大きな建物の中で、其建物のやうな洋風の知識を授けられることだと、考へるやうになりました。此三つの語は、皆「まなぶ」行爲であることに變りはありませんが、文字から學ぶことゝ、文字に據らず實際から學ぶことの二方面のあることが、村々の言葉の上から窺ふと、何となくはつきりするやうに感じられます。

又此外に「耳學問」とか「聽學問」とか、或は「看取學」などといふ言葉もあつて、それぞれ適切な場合に使はれて居りますが、いづれも文字に據らない學問の方法で、古來からの傳承に據つて學ぶ學問でありました。殊に「看取學」といふ言葉などは、頭腦の明晰な人を稱讃する時などに聞はゞ「看取學の達者な人だ」といふやうに申しました。又時には注意の行渡らない者に向つては「物事といふものは、看取學といふて、聞かすと覺えて置け」といふ風に訓戒の時の用語ともなつてゐます。私達は是等の言葉に依つても、學問といふものは机の上や、大きな建物の中で、文字ばかりで學ぶものでないことを教へられるのでありました。所謂傳承の學問は、過去ばかりでなく、現在に於ても行はれてゐるといふことを認識せねばならぬと思ひます。

私達は文化の段階に立つて、つとめて新知識を追ひ、考へても見ずに舊知識を不用でもあり、又貯へ過ぎてゐるやうにも思つてゐました。新知識は學ばねばならぬことはいふまでもありませんが、傳承も亦譯なく忘れてはならない善でありました。私達は舊い思想は時には捨てゝもよいと、投げやりに考へることさへありますが、實際に當れば中々捨て難いことが多いのであります。斯うした無言の繼承こそ

は、前代の祖達が私達に遺した文化の跡でありました。それが又、國の力強い傳統の精神とでも申しませう。

私達の舊い知識は不用でもなく過剰とも思はれませんでした。少しでも過去の生活の跡を顧みようとするならば、其「學のない」のに驚く他ありません。最も身近のことから考へて見ませう。私達は生を此世に享けると、既に民俗の中に置かれてゐました。生れて第一に抱かれた人をダキオヤと申しました。次には命名して呉れた人をナヅケオヤ、又抱かれて屋外に出て、初めて出會つた人なら四五歳の童子でも、それをユキアヒオヤといふ類に、何日も立たぬ中に何故か、生みの親の他に多くのオヤを持たされました。又幼兒が始めて外出する時には、其額の眞中に墨でアヤッコと稱する×印をつけられ、斯うすることによつて、兒等の生命の安泰を得ると信じられてゐました。さうして七つ前は神の子と謂つて、若し死んだ場合には干鰯を

口に銜へさして葬むる慣例が、北の國には廣く行はれてゐます。其干鰯は北ではホシカと謂ひますが、西の方では一般にゴマメまたはタヅクリなどといつて、年の初めのお飾りや、目出度い日や特に田植には無くてならぬ魚です。又女兒には神に供へた食物を食べさせないのが、全國的の習俗のやうでありますが、此供物を食べれば緣遠くなると忌まれてゐます。考へればつまらない事柄ではありませうが、それをたゞ俗信として貶して顧みない人は、果して現代に於ても何人あるでありませうか。其つまらない事柄でも據つて來つた原因は深く遠いのでありました。歷史は古い書物に書かれたものばかりでないことに氣が付かねばなりません。今は不可解な事柄や成來りも、說明なしで通じた時代のあつたことを思はねばなりません。それが謂はゞ常民の歷史でありました。いまだに北の村々では、娘を嫁にやる時に、母親や姉達が泣きながらも、再び歸るなと謂つて、出した戸口へ大急ぎで赤灰（粉火

の澤山入つた爐の灰）を十能で撒いてゐます。又同じことが葬送の際、出棺直後に行はれてゐるのです。村々の人達がそんな民俗の中にあつて、昔ながら母から娘、姑から嫁へと、其儘傳承されて日常の生活に溶込んでゐます。彼女等は其中にあつて、如何に物を考へ、如何なる心構へで夫に仕へ人の母となつてゐるでありませうか。都會に住む女性達は、既に久しい間村々の生活から離れてゐます故に、其多くの人達は、村の日常にはうといかも知れません。併し、祖を同じうした私達です。都と鄙の生活の相違はあつたとしても、それでも心の底にはまだ一脈通ずる何物かを感ずるであらうと、私は信じてゐます。

小著「村の女性」を世に送るに當つて、私は謂ひ知れぬ感慨に打たれてゐます。それは小さなうぬぼれのよろこびではありません。それは、寒い雪國の郷里五戸地

方の女性史の一片が、此題名の下に貧しいながらも、私の手によつて兎も角も世に出た心安さでありました。私は時折の歸省だけではありましたが、是だけでも耳にするには、澤山の人達にどんなにお世話になつたか知れません。其厚意に對しては いつも責任を感じてゐましたが、その中に長い月日が立つて、既に他界した人達も二三はあります。今度圖らずも此人達の話集が上梓されてはる〳〵と其手許まで贈られたならば、其内容のよし惡は別として、丁度我が子に再會した時のやうに、喜んで異れることでありませう。又筆の粗をもあれこれと訂正して異れるに違ひありません。さうして又私の日頃の責任も少しは輕くなるのであります。

思へば私は、昭和の初め頃ふとした機會から、民俗學の書物を讀み始めて以來、長い歳月は容赦なく過ぎましたが、未だに學問にならず遺憾に堪へません。從つて此集は前に申上げた「耳學問」乃至は「看取學」の範疇に過ぎぬのでありますが、

それでも萬一若い女の方々が讀まれて、少しでも國の先代の女性史に興味を持たれるならば、此上もない喜びでございます。

尙この度忝けなくも柳田先生から序文を賜り、亦挿繪に就いては今純三先生の御高配を煩しました。皆樣に厚く御禮を申上ぐると共に今後も研究にいそしんで歩みを進めたいと念じて居ります。

昭和十八年一月三十一日

西荻窪の假寓にて　能田多代子

目次

序
自序
篦渡し……一三
村の女性……六七
麻絲さかし……九三
木綿の魅力……一〇五
大百姓と田植……一三一
村の食事……一四九

農村採訪記(一)……一六九
農村採訪記(二)……一九一
峠越え……二二三

挿絵口絵　今　純三

村の女性

一、女の呼名

● 箆渡し

東北では一般に一家の主婦権を継承することを箆渡しと申します。ヘラとは飯杓子のことで、東京ではシャモジ、九州地方ではメジャクシなどと申してゐます。又此地方には別に箆取りといふ語も行はれてゐて、是等は尊ら主婦を意味する言葉となつてゐます。此古風な語の起りは、嘗は〳〵飯杓子は食物を分配する器で、それを握る家刀自は、自ら箆取りだからでございます。是は古い時代の自給経済の遺風で、

當時にあつては一家の財務が主に食物の分配にあつて、それには女性が最も主な地位を占めてゐた關係上、家刀自の權能となつたからだと申します。

考へて見れば若くて嫁ぎ、一通りの教養を積んで、一人前の主婦となるまでの期間は可成り永いことで、言ひ替へれば、「女の一生」と申しても餘り變りがないことです。先づ私は、此永い一生を此地方の女達がどんな段階を經て來てゐるか、話を進める前に其呼名の上から一通り窺つて見たいと思ひます。赤子の呼び名は省略して、赤ン坊が母の乳房から離れて一人で遊べるやうになり、やがて小學校に通ふ頃ほひまでの間を、次のやうに呼びます。

ワラシ（童）　五六歳……十二三歳

●高等小學校を了へる頃になれば、それはもうワラシでなくなつて、女の子は殊更行儀作法は勿論のこと言葉遣ひ其他日常生活の上にもいろ〳〵の注意が、周圍の者から可成り嚴しく致されるやうになり、次で

メラシ（娘）　十四五歳……十七八歳

さうして、娘を持つ親達は「娘と糸べそア大きくなる程邪魔になる」といふ諺もあるやうに氣を痛むやうになります。糸べそとは、田舍では麻糸を卷く糸卷きのことで、可成り大きなものへ、暇さへあれば女達は糸を紡いではそれに卷いて、身の廻りに置いてごろ〳〵させてゐますので、大きくなれば邪魔になります。其やうに娘も年頃になれば、もうどうにかして緣づけなければならないから、氣にかゝつて仕方がなくなると謂ふことでございませう。娘の方も亦既に大人になつた氣持ちで嫁に行かねば恥のやうに考へるのでございます。

私は愛で、斯うした年頃の娘を中心に近親者達の焦慮と本人達の無智に近い純眞さとで、嫁したり嫁されたりする氣持ちを例を擧げて話して見たいと思ひますが、

問題を繰りに離れますから、別の機會に致しますが、兎に角、在方では女の子は遲くも十八位までに嫁に行かなければ、所謂今樣オールドミスの仲間に入れられて、後でも申しますが、アッパ（爰では老女）と人から謂はれる憂目を見なければならなくなります。さうなれば、親も娘も引け目を感ずる樣になります。それだから娘を持つた親達は、やう〳〵手助けになつたばかりの所を手離し難いが、世間體が惡くて家に置いて働かせて居られなくなりますし、娘も亦、氣が引けて村の處女會などにも恥しくて出席が出來ないやうな工合になります。斯んな風で十九二十ともなれば、ほんとうのメラシとは思はれず、嫁になつても亦、年寄嫁などと謂はれる運命になりますから、親達の無暗にあわてるのも無理からぬことで、それが爲にとんだあはれを止める話もあるのでございます。

二、母となるまで

一旦嫁入すれば、今度は周圍の人々から、アネとかアネコとか呼ばれます。上流の方では敬語がつけられてアネサマと呼ばれます。此アネの稱は世間一般の姉のことでもあり、又若い女性達の稱でもありますが、尙よく觀察すれば是は限られた家長たるべき相續者の妻の場合の呼名で、二三男以下の嫁には決して用ゐません。此方は別にオヂヨメと謂ふ呼名があります。二三男以下はオンヂと呼ばれてゐるからの名であります。又妻といふことをオカタと謂ひますが、此語も元は人の女房の敬稱であつたといふことを、柳田國男先生は「婚姻習俗語彙」の中で述べられて居ります。

九州地方ではヨメといふ語が妻と同樣に使はれ、六七十になるお婆さんまでも、

誰れそれのヨメゴ（ゴは御で敬稱）と呼ばれますが、耳慣れない間は異樣に感じました。五戸地方ではヨメと呼ばれるのは短かい期間で、他地方の「嫁住み」などといふ中のことだけのやうです。後に機會が來て所謂箔を渡されるまでの間で、其後はヨメとは普通呼びません。ヨメも亦ネコと呼ばれる期間は殊に短く、子を持つて母となれば、アッパと呼ばれます。アッパは東北にのみ限られた語でもなく、南島でも亦、八重山ではアッパ、其他ではアンマ、アンナ、シマー、アム等の語が行はれてゐて、オモ或はアモの母を意味する語かと存じます。田舎の言葉は下等だと一樣にけなしてはなりません。田舎には古い言葉が訛つて殘つてゐるのが多いのです。

女も娘盛りを過ぎて、廿四五にもなればもう若さの止りで、盆歌などにも

踊り踊るも　二十四五　五六

三十こけれや　子が踊る

と申します通り、それからは下り坂になつて、物の分別もつく頃の三十五六にもなれば、早く子供を持つた者達には、孫が出るのも珍しくありません。農家は勞働の關係上、早婚であるのも理由の一つでありませう。今でも稼手がないからと謂つて、長男が十六の時に嫁を貰つた者があつたり、或は十九位で父親となつたりして、男禮に行く時に子供を負うて歩いて行つた時が恥かしかつたなどといふ述懐もまま聞くことがあります。

斯んな親達がものゝ四十にもなれば、息子等をあてにする氣になつて、「それだからなるべく早く子供を持たなければ樂が出來ない」などと、横着なことをいつたりしてゐます。斯んな風で、自然に孫を持つのも早くなりますが、一女が孫を持てば、今度はアッパと呼ばれなくなつて、オンバと謂はれます。是は祖母のことでございます。

ますが、四十足らずに祖母となつた場合、オンバの部類に入れるのが氣の毒かそれとも亦單に他と區別をするのか、若い祖母達をばナカラオンバと呼んで、其限界をつけますが、勿論此言葉は孫や子達が呼ぶ名ではありません。ナカラとはものゝなかばのことで、此呼名などはまことに細かな感覺によるものと思ひます。

三、祖母の呼名

オンバと謂はれるのはせい〳〵五十前後までの間で、其頃になれば最早孫達も婚期に達しまして、嫁を迎へ、曾孫でも出來ると、家で特別な事情でもない限り、愛で今まで主婦であつた姑から嫁に對して、主婦權の讓り渡しがあります。是が所謂前々から申上げた「鍵渡し」でございます。是を又別に「エヌシ渡し」とも謂はれて居ります。エヌシといふのは家主のことで、遠く離れた沖繩の山原地方では、ヤンヌシと申してゐるやうですが、「婚姻習俗語彙」には次のやうに見えて居ります。

略。古い日本の南北兩端に此の語が殘つて居ることに注意すべきである。家は寢る場所で主婦の管理に屬して居た爲に家主と呼ぶのであらう。と。

既に家主を次の者に渡せば同時に隱居になります。さうして今までのオンバは、やがてババの稱呼に移り、ババと呼ばれる頃はヒコ孫を持つてゐます。さうして又長命でもする老婆などにはヤサゴ(玄孫)も出來るのでございます。其時は今までのババと區別されて、トソリババと呼ばれます。トソリとは年寄といふのの訛りで、ババにも斯うなれば區別がいります。それだからトソリババに對してワカババと呼ばれます。トソリババともなれば、丈夫な者だとカシキ(賄方のこと)位はする者も稀にはありますが、齡も八十以上になつて大方は物の役には立たない方が多いやうでございます。

村々の女性達は、斯んな呼名の送り迎へを經て、永い一生を終るのですが、都會の文化に慣れた人達の目から、此人々の生活を見るならば、なんと申してよいやら分りませんが、人生の中でも一番華やかな娘時代を、謂ふならば、無智にも似た程の純眞さの中に、いちらしくも過して、轉て人の妻となり母となり、次いで主婦となつて、一家をさゝへる双肩に又子を負ひ、尙農事に勵む農村の女達は、今ならば「銃後の女性」などと申して、御奉公の一つにもなつて居りませうが、農村では、今も昔も女性の力の偉大であることには、少しも變りはないのでございます。

四、佛守り

次に、此の地方の婚姻習俗に就いて簡單に申上げて見たいと思ひます。普通、此の嫁取り又は婿取りの形式は、農家に於ては秋から春にかけて農閑期の間の、農業行事の祭りを兼ねて取行ふことが多く、重陽の九月九日の「九日嫁」と謂つた風に、十二月には五日ゑびすの年取の「ゑびす嫁」、同じ九日の大黒の年取の「大黒嫁」といつて、特別な仕度も振舞もせず、其日の御馳走の餅や團子の外に、酒やら蕎麥ハットなどを打つて、連れて來る嫁が多いのでございます。稀には「盜人取」などと謂つて、貰ひ酒といふものを一升下げて行つて、そつと連れて來る風もあれば、湯貰ひと謂つて風呂へ招ばれた樣にして、その儘嫁になつたりして居るのが、是までは多かつたのでございます。

其貰つて來る嫁の中で私が注意したいのは、長子の嫁で、此嫁は貰ふ時には幾分人選もするらしいが、此嫁をば「佛まぶり」と謂つてゐます。佛守りの事で、謂はゞ祖先の靈に仕ふべく、選ばれた地位に置かれる資格を約束される者なのでございます。此事は後の項でも申上げる心算りでございますが、是は沖繩のヤンヌシなどと

同じやうな性質の女性とも云ふことが出來るかと存じます。

斯うした習俗のもとに嫁入りする村の娘達の往時の嫁入姿を、今の「角隱し」と言はれる人形のやうに美しいお嫁さんと思ひ合せるならば、これも亦大變な差で、此頃では村にも都會の風が追々と入つて來てゐますが、明治の末頃までゝも上流階級のほかは、キビナといつて、今の箪笥代りで大方「衣櫃（いびつ）」の意でもございませうが、大き目な蓋附きの箱で、其中に蒲團もない其頃は、オワダと稱する夜の物まで入れて、是を迎ひの者に背負せて行くのです。オワダは先年佐藤生活改善館の中で、何か文化展ともいふか、全國の日常生活必需品を陳列した中に、岩手縣のものであつたか一つございました。皆あんなものを着て藁を敷いた上に寢るのでした。

嫁の晴着と謂へば、長衣裳もなかつた當時、今はミチカといつて仕事着になつてゐる、膝切りの麻布の着物を着て同じ股引（モフキといふ）を穿き、ダテ帶といつて今の三尺帶を前に結び、前掛を締めた其上にマカナイと稱する筒袖の、膝あたりまで來る着物を羽織り、ぐる〳〵巻きにした頭の上に手拭を被り、又其上に三角ボッチといふ風呂敷大の布を三角形に折つたもので顏を包み、赤い紐をつけた花笠を被り、あかね染の切れを笠の前に下げ顏を隱して隣りから來るにも馬に乘り叔父伯母に送られて來たのでございます。

斯うして、嫁が婿方の家に到着すれば先づ「敷居の杯」と謂ふ儀式があつて、そ

れを受けて上に上ります。さうすると直に婿の案内で佛間に入つて、祖靈を拜する風があります。何處にも是と似た習俗があるやうですが、特別に長子に限られて斯んな名稱のあることは注意すべきことだと思ひます。さうして此嫁ばかりは輿入後に於ては、前にも申上げた樣に、アネ、アネコ、アネサマなどと尊稱されて、二三男の嫁達や或は家附きの娘達よりは地位が上で、人々の取扱ひも亦自然と別な優待さが見受けられます。長子の格式が配偶者に及ぼす特權とでも申しませうか、是だけは何處も同じことでございませう。特に冠婚葬祭の場合などは重要な役目があるらしく感じます。斯ういふことは、一面儀禮ではありませうが、嫁入りと同時に斯うした地位に置かれて、特別な待遇を受けるのは、所謂、エヌシとしての將來を約束せられる過程であつたらうと存じます。尙又「婚姻習俗語彙」は左のやうに載へて居ります。

「略。古い時代は嫁の引移りが卽ち主婦としての入家であつた。」と。

さうして又此地方の婚禮には、花婿が式場には列席せず、嫁は姑が貰ふものだと謂はれ、婿は此日は臺所にゐて酒の澗などをしてゐる風習があるのであります。

五、せんだく渡し

又此地方には「箔渡し」に先立つて、嫁と姑の間に「せんだく渡し」といふことが行はれてゐます。せんだくと申しますと衣裳のことで、洗ひ濯ぎのせんたくとは別な言葉でございます。語義の點は存じませんが、衣裳持のことをせんだく持ちと申しますし、おしら神に着せる着物なども「おしら様にせんだくを着せ申す。」などと申すのでございます。

此「せんだく渡し」の慣例は、嫁入して三年後のことで、それまでは嫁は婿たる夫の世話を一さいしなくてもよいことになつて居ります。手拭や下帶のやうなものまでも、洗濯一つしてやらなくとも、着物の綻びを繕つてやらなくとも濟むのでございます。それだから、若い嫁達は暇さへあれば自分の部屋の中に入つて、自分の仕事ばかりしてゐます。矢鱈に手を出すことは却つて悪い位に考へてゐるのでございます。そんな變つた習慣が、或は傳統のやうになつてゐるのかも知れません。

私達此地方の者は、もと〳〵ぼんやりな性質ではございますけれど、稀に氣がつくことはあつても人のことには、きまりが悪い様に思はれて手を出さずにぼんやりと眺めてゐる風がございます。

私は、最近「せんだく渡し」に就いて再吟味する爲に、圖の知人に聞合せたことがありましたが、其返事に、「略、せんだく渡しは以前は三年であつたが、此頃は昔に比して晩婚であり、又嫁としての理解や認識が高まつて來たので、稀に一年位でやるのもありましたが、現在では大抵嫁入當初より婿の身の廻りをやるやうになりました。」といふ明確な遷移の回答を得て喜びました。

ではございますが、未だ一般には此嫁住の間は婿の世話は總て姑がするので、嫁

は姑の指圖通り働いて居る風があります。やがて滿三年經てば「せんだく渡し」が行はれるのでございますが、その時は姑から嫁へ婿の衣裳其他のものが全部引渡されます。

「これからは、お前が何でもするやうに」と、申渡されます。別に儀式めいたこともありません。

今は殘つてゐないやうでございます。その後は夫の身の廻りは全部嫁の管理になつて幾分仕事も多くなりますが、嫁の立場は大目に見られるやうになりますので、朝夕や雨の日などは幾分自由にもなれるのでございます。

併し嫁住の間は絶對に主婦の支配下にあつて、少しの權限も與へられて居りません。代りに家の經濟にも少しも關はりはございません。嫁か若しヨマキ（へそくり）等を持つてゐましても、家の方にはわけなく使つたり、出したりしてはならないので、まことに窮屈な感じが致します。さうして嫁の入用な品、たとへば、切れや絲其他の日用品までも姑から貰つて使ふので、そんなものまで姑は可使ひして嫁に與

へるのでございます。在方は斯樣に家の制度が嚴りはつきりし過ぎてゐる爲に、時折は滑稽な悲喜劇までが演ぜられるのでございます。

六、嫁住みの苦勞

若くして嫁入した女達の、主婦を繼承するまでの期間が相當に長いのでありますが、其間家庭的な責任がないかはりに、自由なことの出來ないのは致し方がないのです。他地方では此間を嫁住みと謂つて居りますが、此地方では男の「部屋住」といふのに對して嫁の方には言葉のあるのをきゝません。何事も姑の指導方針に從ふのですから、たまには彼等らしい思ひつきもありました。

農家でも富裕な家庭では、嫁達にもヨマキが可成り與へられます。それにはいろいろな方法がありますが、不自由なく二人が使ふだけはございます。併し家では表

向き一錢も遣つてはなりませんので、時たまに魚でも食べたい時などは嫁が亭主に相談などして、海賊や鯖でも買つて來ることがあります。さうして姑には、自動車が積んで來た魚を落して知らずに行つたものだから、街道で拾つて來た、といふ風に言ひ繕ひして居ります。姑も亦心得たもので、よろこんで受取りながら、蔭では「あの人達が食べたいから、買つて來たのだらう」などといつて笑つて居ります。

もつとをかしなことは、娘を嫁にやる時、まだ部屋住の父親が同伴するのに、生れて初めて紋付羽織に袴を着けて行きました。餘程うれしかつたと見えて、其儘では置かれなかつたのでせう。町までわざ〳〵行き、其姿に白扇まで持つて、丁度花婿其まゝの寫眞を撮影して歸りました。家に歸つても、それが遠慮といふものか、それとも内密で錢を使ふことが許されない爲に、そんなことをしては惡いのか、兩親には其晴の寫眞が見せられないのです。それを隱すに心配して箪笥に入れると閉けられる憂ひがあるし、仕方なく長持の中に入れて置いたが、どんなに立派に寫つたのでせうか、女房や子達が見たくて、家に這入れば長持から出して眺めてゐるので、終ひには餘りをかしくなつて姑が、お前達ばかり眺めてゐないで、アヤ(親父)の立派な處を私達にも見せないか、と謂つたなどといふ滑稽もございます。箪を握つてゐる姑と、嫁との間には斯樣にも大きな權限の相違があるのでございます。習慣とは申しながら嫁住の忍從な生活が氣の毒に思はれて仕方がありません。

私は先年採集に行つた從姉の家で、一夜皆集つてゐる處で嫁話の末、斯んなことを言ひました。九州地方では、嫁をやる時は茶金といふものが付物で、普通二百圓が(農家並)相場だ。それに茶のむしといふものと、又米を身分に應じて多寡がある、何俵か付けてそれをやつたり貰つたりするのが當り前で、茶金の少ないのは娘をやる方で恥のやうに心得てゐる。此邊と來たら、娘がやう〳〵役に立ちさうになる

村の女性

と、西も東も分らない中に嫁に貰はれて來て、やれ家の嫁が良いとか惡いとかと言つて勝手なことを言つたりするが、育てた親のことや娘のことも考へなければと、冗談に謂つて笑はして居りますと、もう四十にもなつてゐる此家の嫁が、眼に涙さへうかべて、「其お話を村中の年寄にも娘達にも皆に聽かしてやりたい。そのお話を聽いて胸の支へが取れました。」と謂つて、さつと席を立つて行きましたが、すぐに大きな新聞紙の袋にせんべいを澤山持つて戻つて來て、私に、お上り下さいと出したのには驚かされました。私は何もそんな外交的な意味で言つた心算りではなかつたのでしたが、村々の嫁達は斯うした氣持ちで、永い年月苦勞をして來て居ります。併し其代り家事一際にはいさゝかも關係がなくて、有らうと無からうと問題ではありません。時には粟や米の四五升は盜んで賣らうとも別にあやしむ者もなく、家と人にもよるのでございませうが、隱して置いた米袋を姑が見ても、「ホイ、

米か」位の調子で、見て見ぬ振り、謂はゞ公然の祕密として通つたり、通させたりしてゐるといつても過言ではございません。

七、農事と嫁

農村の早婚は勞働に基因して居りますから嫁婿を貰ふことを「稼ぎ手」を貰ふといふことは申上げました、一人前とは申しながらまだ年若い者達の勤めは並々でなく、冬の朝、夏の炎天、田畑で働く外に又家には牛馬の飼育が控へてゐます。此地方の米搗歌に

一人娘を　市川さ呉れて
朝は早起き　飯をたき
四十八から　馬のふね

これを見せたい　我が親様に

子供の時のうろ覚えのもので、少し違つてゐるかも知れませんが、兎に角嫁に來てから毎日日日朝早起きしての勞働に、冬の寒い日には顫れでも切れてうらめしいこともまゝございませう。數多い飼桶を眺めて自分の苦勞を愛する兩親に同情して貰ひたいと嘆いてゐる歌でございます。家族の多い家では、五升鍋一斗鍋といふ大きな鍋を抱へては煮炊きもしなければなりません。「女は鍋力」と申しまして鍋を持てないやうな女は無能な者に取扱はれます。殊に五月の田植時には猫の手も借りたいといふ忙しさです。夜の明けない二時頃から起きて田植ゑの仕度に掛ります。早乙女として田に入れば、人に後れると「坪に入れられる」といつて、一人田の中に殘されるやうな植方を老練な人々にされて、辱かしめられて泣かされるやうな目に會はされます。眞夏は草刈りに未明に起き出でて、昌一駄分は朝飯前の仕事と定めら

れてゐます。でも是だけは女に無理で大抵は亭主の手傳があると申しますが、それにしても二人で二駄は受持たねばなりません。夜が長くなれば粉ひき、麻糸さかし（さかしとは扱ふこと）など夜なべに暇もありません。さうして明け暮れ忙しい月日を送つてゐるのですが、そんな生計の中に彼等嫁達の一番大きな樂しみは、次に申上げる春秋の里歸りでございました。併しその前に秋の穫入れのことを一通り申上げねばなりません。

八、山じまひ

それには、此地方の秋の穫入れから申上げねばなりません。先づ二百十日も事無く過ぎて、小學校の唱歌のやうに村のお祭りも了れば、刈入れが始まります。第一に畠のものからで、粟、稗、蕎麥、大豆の順序で、刈入れられた是等のから物は藏

束づつかに重ねられて、畠の中に並べて置かれます。是を「しまもの」と言ひます。是はそのまゝ置いて次には稻刈りに移ります。田の作業にかゝれば又忙しくなります。此の地方の田歌の中に

朝に起きたら　前田を見ろ
前田　早稻は　しがれてる
しがれたら　夜に出て刈られ
七十四人も　出て刈られ
七十四人　あいしよの中に
長者や聟どの　かたてゐる
ひねり鉢巻　イヨ左鎌
あれは長者殿　聟殿か

農具の不完全な往時は、北の國の農民達は夜も作業してゐることは事實でありまして、月夜には稻を刈り畑も耕したと申ます。此歌は誇張もありませうけれど、昔の大百姓の生活を物語るものであります。北の國は雪の早い原因もありませうが、秋の穫入れを急ぐことは實に目まぐるしい程で寧ふいとまもございません。稻刈りが了ればそれを田の中に積み暫らく乾かします。農業の技術も北と南では大變に相違がございます。南では粗にしてからネコブクといつて大きな厚い莚の上にひろげて何日でも乾しますが、北の國ではそんなことのない代り、田の中でヤマニヲといふ稻積方法で、穗を風にあてるやうに南向きに洞穴のやうに作り、外側には根本を出して完全に乾燥させます。その間に畑のから物を家に運び入れるのであります。

秋の刈入れ時は、農繁期中でも田植に次ぐ忙しさで、朝は未明に夜は十一時頃までも、ヤマ仕事(耕地作業)ニハ仕事(屋内作業)に夜も日もなく働かねばなりません。

もう此頃は冬の早い年だと嶽嵐（たけあらし）といつて八甲田山や其他の高山から吹き下して來るみぞれが里を訪れて來て、日に日に寒くなつて參ります。その中に四方の高山が眞白く天を突くやうになつて來ると、やがて雪がやつて參ります。犬や子供がよろこぶのと反對に農家は大變に困ります。さうして時には畑のから物を置く中に雪の變來を受ければ、「しまもの」を雪に隱されます。此雪を「しま隱し」と申してゐます。此島隱しは國々によつて少し名が違つて、「弘法さんの足あと隱し」などゝいつて、昔話にもなつてゐるやうですが、農家では大變に嫌つて居ります。此地方でも近年農業の技術も可成り改良されて來て、播種も早くなり從つて秋の刈入れも早くなつたから、島隱しの雪にも會はなくなつて來たと申しますが、冬の早い年にはまゝ襲はれることがあり勝ちでございます。さうして新暦十一月頃は此しま物を家へ運び終りこれを「ヤマジマヒ」と申します。此ヤマジマヒの殿りを承はるのは、何故か苧種の役割でございます。苧種は麻糸を取る麻とは別に大豆畑等に栽培されて種だけ取るので、糸を取る麻とは栽培方法が全然異つてゐます。

九、秋　泊　り

農事にはいろ〳〵と作法があつて、春の播き始めから順序がありますが、秋も同樣に島物を家に運び終へると、最後に苧種子を山（耕地）から背負つて來るのが、何故ヤマジマヒか、まだ私には分りませんが、衣・食・住と申します言葉の衣は、人間生活には先づ第一に大切な條件であつた爲に、遠い昔に麻衣が衣料として用ゐられた當初の、或る感激が後々そんな形になつて、傳はつてゐるのかも知れません。日本の神事には必ず用ゐられてゐるのも亦意味のあることでせう。其他普請の時にも用ゐられますし、產婦には呪力あるものとして鉢卷にさせます。又死者ある時にも用

ゐられ殊に女は麻糸を扱かさないと蛇になるとさへ謂はれてゐます。いづれも故あることでせう。ヤマジマヒの日は家ではオカ神を祭ります。蕎麦や團子でも拵へて食べますが、此日からは、女達は長衣裳と稱して裾まで來るムヅリ着物を着る特權とてもいふべき、開放された氣分で仕事着を脱ぎ捨てゝ憚らないのです。着物を稱する此地方の言葉にはいろいろありますが、農家の女達には少し不似合ひに思はれる程上品なこの言葉は、年中麻布の仕事着ばかり着てゐる者には、長くて肌觸りのよい木綿等の着物は定めし優美に見えて、不斷に使ひなれた言葉のキヅク、キカリなどといふ田舍言葉で呼ぶのは忍ばなくて、舶來語のやうに珍らしい長衣裳といふ新しい言葉を使つて區別したものかも知れません。よくは調べたことではありませんが、此長衣裳は麻布ばかりの時代にはなかつたのではないかと推意して居ります。木綿の村々に入つたのは、しかも東北の寒村に入つたのは、もの〳〵五十年に

もなるやならずだと言ひます。現に、若い頃の木綿の魅力をまだ六十五六の老婆達は其まゝ保存じて居りますし、又仕事着のミチカも新しい物は今でも禮服の一つで在方では皆着て歩いて居るのでございます。

ヤマジマヒ後は家の中ばかりの仕事で、から物落しの作業になります。此仕事は昔は可成り長くかゝつたと思はれます。今ならば大半は機械にかけて片附けられますが、雜穀の方は別としても稻の始末等には、稻扱が出てからも、年を越して二三月までかかるのが普通とされてゐたと申します。稻扱の變遷の歷史に女が參與してゐることは、その方言でも分りますが、それは柳田先生が鄉土研究其他で教へて居られますから省きます。

女達が、から物落しをして、後に稻扱きに移り、一通り豫定の作業が終れば、「アキジマヒ」になります。是で農家の年の作業が終了することになりますが、さうす

ると家々では農神を祭つて祝ひます。神には十六團子を作つて供へ、一年中の骨休めをするのでございます。收穫終了後の「秋仕舞」の振舞は何處も盛大で、此日は嫁婿が里に招かれて行きます。それが終つて舊曆十月の二十日は、嫁達が何にも増して待ちこがるる里歸りの日で、「秋ア飽き次第」と謂はれ、三十日間は泊つて來られる舊來の慣例であります。今ならば休暇のやうなもので、是を「秋泊り」と申します。里歸りの土産は大抵酒二升と餅で婿にそれを背負はせて送られて行くのでございますが、實家に歸れば母や姉達は「秋泊りア來た」と、よろこんで迎へます。

此秋泊りを又「機織り」とも申します。それは姑から貰つた麻糸を紡いで、機を織つて歸るからでもあります。此長い泊りの間に嫁達は着物の繕ひなどもして、決して遊んでばかりも居りませんが、其中に日も經てば、再び婿の迎ひを受けて歸ります。餅などの土産を貰つて大きな風呂敷包みを婿に背負はせて、仲よく歸るので

ございます。

一〇、春泊り

農家の食物調製には女達は並々ならぬ苦勞をせねばなりません。それでも最近では、何處の村々にも、水車もあればツキヤ（電力精米所）も出來て、穀類ばかりでなく製粉も出來るから、苦勞なしになつてゐますが、昔の生活は毎日それに追はれてゐる有樣でした。米麥は手で搗き、蕎麥、麥は手でひき、一日に一度は團子餅を食べねばなりません。粉ひきも容易な業でありません。それを年取りまでには、せめて正月中食べる物を貯藏するやうに、努めるといふのはどんな農家でも出來ないものであつたと申します。殊に十二月は神々の年取りがあり、白い飯ばかり炊く日が多いから、不斷よりは何倍も入ります。寒い時の食物作りは、腰が切れて手からも

是からも血が出るものでございます。

十二月の年取は男の年取りで、明ければ大正月と申し、十三日から小正月といつて、女の年取になります。女の年取は村によつて違ふらしいが、在方は十五日の晩で、男の年取の魚料理に對して、女の方は精進料理でございます。小正月は年中行事の中でも一番大切な月と見えまして、春のことぶれと申しませうか、それが皆農事に因んだ行事で、十五日の年取りの夕方には女達によつて、田植の眞似事が雪の上で行はれます。此月は何彼と行事ばかり續きます。やがて二月年取も過ぎて、昨年からの收穫物の後始末も一先づ終れば、若い嫁達には又春の里歸りが來るのでございました。是を「春泊り」と謂つて居ります。

春泊りは二月末頃になりまして、「春ア二十日」と稱され、秋泊りよりは短かい期間でございますが、是を又別に「ッヅレサシ」とも申して、新らしい麻布、是をノノと

申してゐますが、それの染まつた物を里に持參して、仕事着を作ります。是は晴着で嫁達が五月の田植に着て、田植ゑをするのでございます。田植には其他に姑からは仕着せがありまして、赤い伊達帶と、腰卷と三角ボッチ、手拭等を貰つて、早乙女になるのでございます。ッヅレサシは女達の樂しみで、前庭の日向へ莚を敷いて刺してゐるのを見かけます。上手な人だと日に二枚位のミチカを刺し上げると申します。始終手から離さずに持ち歩きながら刺して居ります。近年木綿の流行につれて麻衣を着る者が尠くなりまして、東北地方の麻畑が殆ど奥の村に行かなければ、見られないやうになりましたが、又時代の變遷は已むを得ないもので、木綿は着られない當今となりました。村々は又昔のッムやオボケ、是は麻絲を入れる桶のことですが、是等を取り出して麻布を織つて居ります。今年あたりは、麻の栽培も從前のやうになるのではないかと思つて居ります。

つづれさし

一、家と主婦

斯うした歳月の中に子を持ち母となつて、農事の傍産育の大役を荷なつて人生の大半は過ぎますが、それでも舅姑の健在な間は、單に嫁としての生活を送らねばなりません。前にも申上げたことでございますが、嫁住の期間中は、どんな場合でも家事には勝手に手を出してはならぬ習慣となつて居ります。小さな例をあげるなら、嫁は勝手元で少しでも氣をきかしてお鍋などに手を觸れることでもあれば、姑に大變嫌はれます。さうして「うちの嫁は、エヲシになつた氣だか、勝手に鍋さかしする」等と申して、其不遜を詰るのでございます。方言さかしは、物を取り扱ふことに申します。斯んな風で嫁は家事には一切責任がない代り、又斯んな些細なことにすら、手も出されませんし、況して餘計なことなど口に出してはなりません。たゞ

姑の指圖のまゝに働くだけで、謂はゞ勞働を提供するばかりと申してよいかも知れません。嫁婿を貰ふことを「稼手を貰ふ」といふことも、つまりは勞働を單位とした言葉で、前に九州の茶金のことを話しましたが、私の住んで居た或る小さな町でのこと、近在の大地主から町の或家の娘を貰ひたいといふ話で、茶金を二千圓出すといふことでありました。其結末は知りませんが、他にも澤山あつて茶金の少ないものに應じない風もありました。これも結論ばかりいふならば、茶金といふものゝ性質は謂はゞ大切な稼ぎ手の代償と見てよいでせう。

それだから、嫁は姑の貰ふものでないと謂はれ、「嫁取」には姑が一番大役で、婿は式へは顔も出さず、姑は仲人から嫁の受渡しが濟めば、嫁に對して、特別に姑の膳に附けてある身缺鯡を取つて二つに折り、それを渡して「身を缺いても務めて呉ろ」と申渡してゐます。此地方では嫁入りのことを「嫁取」と謂ひま

す。此古風な形式は今日の「婚姻」といふ意味とは餘程異つては居りませうが、いまだに此通りで、それだから姑の氣にいらぬ嫁は離縁になる第一條件で、さかしい嫁女になれば、姑の氣に入るやうにばかりつとめて、却つて婿の反感をかつたりする例もまゝあるのでございます。主婦の權能の隱れた强さが偲ばれます。

一二、中抜き

此地方で一家の家長として家權を握る男性をゴテと申してゐます。又妻が其夫を呼ぶ場合も「ゴデな。ゴデな」などと申します。なは敬稱で爺なとか婆なとかいふのでございます。ゴテは又夫の總稱のやうでもございます。氣をつけて聞いてゐると「徳川ア三百年もゴテをしてゐた」と謂つたり、幼にして父を失つた兒などにも「是は家のゴテです」と紹介されることもあります。長兄でも家權を握らない中は、「まだゴテでないから」等といふ處を見れば、一國或は一家の支配權を握る者の稱、即ち戸籍上の戸主にいふのがほんとうのやうに思はれますが、語の意味は私には分りません。辭書類には御亭主の下略とし、いろ〳〵文獻を掲げて居ります。ゴテの語は全國的に弘く行はれてゐる方言で、意味も亦地方的に多少の差があるやうでございますが、御亭主の下略といふことには多少の疑ひがあると謂はれて居ります。

此家長として一家の支配權を握るまでの部屋住の期間は普通は此地方ならば可成りに永いやうでございます。家によつては舅姑の健在な間はいつまでもゴテをしてゐることもあれば、又時には主人のない後、姑が一人で事實上の家權を握つてゐる場合もあります。殊に婿養子の場合など死ぬまでゴテは渡されないことが多いと申ます。若しゴテを親が握つたまゝ長生してゐる中に、不幸にして子たる夫にでも早世されることがあれば、其時は嫁たる其妻女には家權が渡されずに、間を拔かれて

其子にゴタが譲られます。即ち孫夫婦に家權が渡されますから、斯んな場合は一生主婦權を握る機會を失して、氣の毒な生涯を送らねばならぬ女達もあるのでございます。斯んな場合を又ナカヌキと謂つて居ります。併し、大體に於て家權は、孫に嫁を迎へると子に渡して隱居をするのが常識とされてゐます。

此慣例習俗は東北ばかりでなく、是も遠い琉球にもあつて、比嘉春潮樣のお話しでは、あちらでも斯んな場合は、主婦を嫁に讓らないと親戚が承知しないで、誰も相手にしないやうになるから、つまり或時期に於て自然きまると申すことでございます。

一三、篦　渡　し

主婦權の繼承並に讓渡に就いては、國の各地でどういふ風にしてゐるかを一二申上げて見ますと、信州北安曇では、シャクシワタシと申して、五戸地方のヘラワタシと同じことが衆せられます。佐渡にも亦信州と同じ言葉があつて、

添うて六年子の有る仲だ
嫁に杓子を渡しやんせ

などの民謠も行はれて居ります。伊豫北宇和郡御槇村では、シャクシクビヲワタスと謂ひ、長男が結婚すると同時に主婦權を其嫁に渡すと申しますが、別に儀式めいたこともなく隱居をするといふことです。是などはあまり例が少いのではないかと考へられますが、確かなことは存じません。又遠州には「嫁住廿年」といふ言葉があるさうでございますから、やはり主婦權は永い間渡らないと見られます。此外、美濃揖美郡德山村では、嫁に鍋地蟲、是を主婦座と申してゐますが、此座を渡すことをホンワタシと申して、年末年始の機會に讓り渡すといふことでございます。五戸

地方では主婦權讓渡の言葉、即ち「箆渡し」の外に又「エヲシワタシ」といふ語も行はれてゐますが、此の譲り渡しに當つては少しばかり儀式めいたこともあつて、前の主婦即ち箆取りから、別に「アトトリエヲシ」といはれてゐる後繼者の嫁に對して桝と鍋の蓋とが渡され、又ゴテの方からは息子に桝に若干の金子を入れたものを渡すといふことです。併し最近は殆ど此習俗が見られなくなつたと謂つてゐますが、今の中なら尋ねたらあるかも知れません。私の知つた上北郡藤坂の或農家での話に、父から子にゴテを渡す際に二百圓の金子を桝に入れて渡した處、息子はそれを不足として受けなかつた。それで父は同じ事ではあるがと謂つて、家にある穀物を賣つて何百圓にかして渡したら、それでも受け取らなかつた。すると嫁がさツさと取つたといふ話もありました。

此習俗を、東北地方では、故佐々木喜善樣がたつた一つ正確な報告を殘して呉れましたが、それは岩手縣遠野地方のことで、爰ではやはりヘラワタシと謂つて、主婦を繼承すべき嫁に、姑が鍋の蓋の上に大小の杓子を並べて持出し、其大きいものを以て嬶の鉤鼻を叩いて後、之を釜の上に置いて、兩手を以て嫁の方へ押遣る、と報じられて居ります。五戸地方で此行はれる機會はどういふ時か、或はいつ頃の期節に於て授受されるか、今は注意に缺けて記されないのが遺憾でございます。但し分家などを行ふ場合には、大

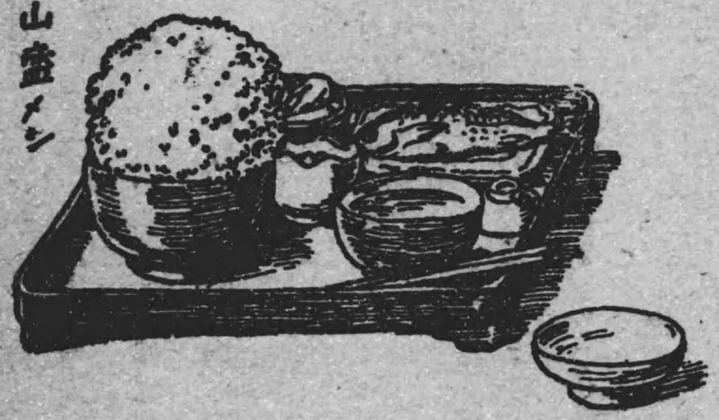
抵收穫の濟んだ後の、秋の候に行はれてゐますから、饒渡しも亦、其頃でないかと想像致してゐますが、是も確かではございません。

一四、主婦は大黒柱

主婦を篤取りと此地方でいふことは、所謂食物の分配權を掌握する者を、一段と具體化した謂ひ方でもございました。それだから主婦たるもの〻第一の要素は、一に「飲ませ食はせ」と謂はれて、饗應に留意することが肝要な條件でもありました。次で、着せ被せ、衣服の世話でございます。孫子をからぼる、是は育兒の務めのことでございます。尙一番大切なことは田畑の耕作の手配などで、家事一際の切盛りを任務とするのは、田舍の主婦の普通のことでございます。俗に「ゴテは立物」と謂はれて居ります。家に取つては主人は表看板でございますが、大家になればなる程

主婦達には氣働きがなければ役に立つものではありません。それだから主婦の才覺は一家の盛衰にも及ぶと申されて居りまして、又「女は家の大黒柱」といふたとへもある位でございます。主婦は又氣が大きくなくてはなりません。食物分配權を握る者の一番にむづかしい心構へでございませう。飲食を惜しむやうでは大家などは殊に嫌はれ、延いては家の衰亡にもかゝはるものとさへ思はれて居ります。其氣の大きいことをば此地方でタイキと謂つて居りますが、其タイキを示す一つの例として斯んなことが謂はれます。

家々に祝儀不祝儀のある際、客に饗應する本膳の食事に二の膳を出しますが、是をオワキと申します。その食膳が出ると客一同は一先づ食事を中止致します。すると其家の主人が座敷へ出てオワキをすゝめる挨拶をして退くと、今度は主婦が代つて出ますが、其時お鉢に新しく御飯を入替へて持つて行きます。それをオテンバナ



山盛メシ

又はオランビラと稱されてゐます。さうして主婦はそれを客に勸めて給仕をしますが、客は斷らすに少し貰ふやうにして、四ッ目かさと稱する大椀の蓋を出して少量の飯しか貰はないやうにするのですが、出されたものには給仕人がなるべく高盛りにして返します。客が若し何氣なく大椀でも出さうものなら山盛りにされて主客一同大笑ひをするのです。此習俗は他地方の婚禮の際に、客に强ひる「姑の强盛り」と稱するものと、もとは同じものか知れませんが、今は姑が食料を吝しまぬ心といふ譯はゝ、タイキな處を來客に示す儀禮のやう

になつてゐます。是が本來の意義とも思はれませんけれど、斯うした氣持ちの試錬を經て一人前の主婦と稱されるやうになります。

一五、主婦の特權

尙、此地方の習俗から見た主婦の絶對的な特權のおもしろい例を一つ申上げて見ませう。

農家の結婚が早い理由は前に申上げました。それだから子供達の成長も早く、まだ嫁住の中に自分達の娘が嫁入りするのが多いのであります。其樣な時には、母としての心情は、寧ろ哀れなもので、自分の娘を嫁にやるのではあるが、自分達は家の族員に過ぎません。ヨマキを如何に澤山持つてゐても、大びらに好きな物品を買つて與へるわけにもゆきません。それればかりでなく、娘の晴の婚禮に、かなしいこと

には、母として附添うて行くことが出來ないのでございます。仕來りとは申しながら、我が子の門出を泣く〳〵門口まで見送る位がせめてもでございます。是に反して姑は、「今度だけは、私の役だ」といつて、うれしく附添ふことが出來るのでございます。こゝでは姻母としての愛情よりは、家から見た主婦の權能の絶對的なことを思はせられます。而して此風習も決して新しいものではなく、以前大家族制度時代の所謂家主の大いなる權能の面影を殘してゐると申してもよいかと考へられます。

一六、主婦の役目

村々の生活は新しい言葉でいふと、相互扶助によつて成立してゐます。それをユトといふことは一般的でございますが、別に手間替へとも言へば、又區替へともいふ言葉があつて、是を言ひ換へれば義理と人情との美しい交錯でもありました。此中にあつて主婦の役目はいろ〳〵ありますが、今は急ぐ爲にそれ等のことを書くことが出來ませんから、爰では特別の主婦の役目を一二拾つて見ませう。

村々では家普請のことをヤドコと申します。普請の出來上つた後、家移りの時には主婦は主人よりも重要な役割があつたのでございますが、注意すべきことかと思はれます。先づ家移りにニヌシが一番先に、手桶に水を新しく汲んで家に入り、上には上らず勝手元に置いて來ます。次には又大黒惠比須を持つて入り神棚に上げ、其後は誰が何を持つて這入つてもよいことになつて居ります。

又、家に死者ある場合、葬送には主婦が家に殘りますが、出棺の直後手桶を擔いて大急ぎで水を汲みに行きます。往き來とも無言でなければなりません。すると家にゐる一番近い親戚の男が、水汲みに大聲で「早く來い」と呼び、此汲んだ水を「聲掛け水」と申します。此地方の俗信に、「聲掛水を飲むな、早く死ぬ」、と謂つて戒

められて居りますが、私達は子供の時召使などに、水を飲みたいから汲んで來い、と言附けた時、弟達がそれを先に飲むと言つてきかなかつたやうな場合など、よくさう言つてたしなめたものです。聲掛水の本體が斯んな處に潜んでゐましたが、何の爲に聲を掛けるかはまだ知りません。

その忌まれる聲掛水は、是も出棺直後大急ぎで座敷を掃いた箒と竹で作つた帚に浸して、それで爐の火を全部消し、是を火を切ると申します。一旦消した火を主婦は更に新に焚きつけて、今度は新に此聲掛水を以て煮焚きをするのでございます。斯うして火を切り替へることによつて、恐れられる死火の穢れが改まると感じられそれからは他の人も家の者も火を共にすることが出來ると信じられて居ります。

此地方の井水に就いての習俗はまだ疑問とするものが多々ございますが、それは直接此問題とは關係がありませんから、別の機會に考へることゝして、此「聲掛水」が、場合を別にする年中行事の正月の「若水」と略似てゐるやうに思ひます。若水の場合は年男が汲みに行きますが、やはり汲みに行く者は無言でなければなりません。若し呼ばれて返事をすれば死ぬと信じられてゐます。それだから水汲人は口に物(水に濡らした櫛か白紙かを)を銜へて行くと申します(戸來)。神を祭る水乃至は清めの水とならば穢れてはならぬことではありませうが、尙、靈や魂に對する、此地方人の持つ古い信仰の觀念が潜在してゐるやうに推測されるのでございます。

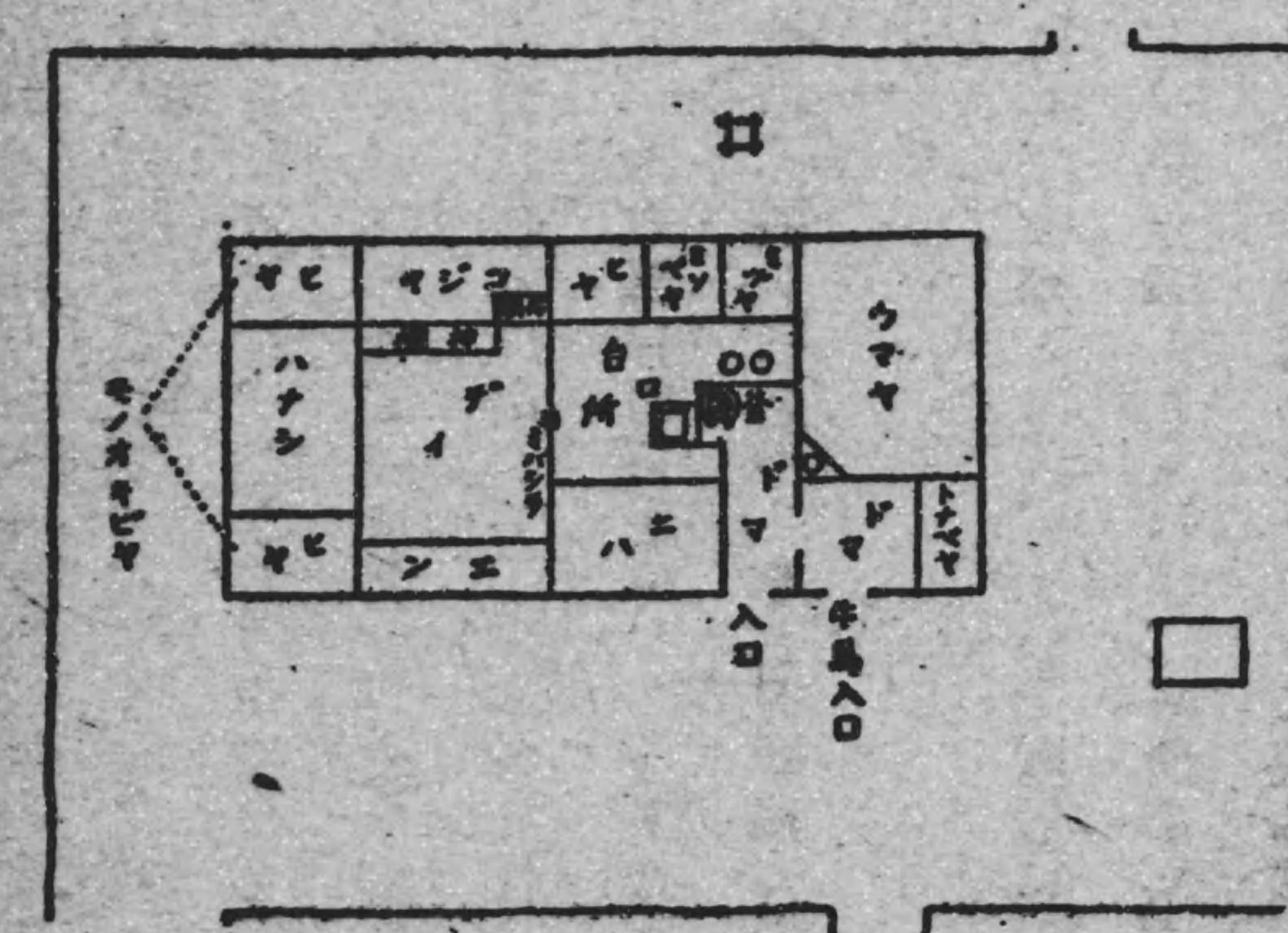
一七、むすび

先年、日本女性史といふ立派な本が著されました。主に由緒正しい女性達の系圖を調べたものゝやうに記憶して居ります。正しい家柄と恵まれた機會によつて、偶

然にも記錄せられてゐる是等女性達は、幸ひにも後の歷史家に認められ、其整理によつて千年の日本文化史を彩つてゐます。常民の私達の女性の持つ歷史も亦、同じやうに源は遠いでございませう。さうして又、今から見ればまことに不可解な仕來りまでをも傳承して、綿綿として今日に至つてゐます。而も、それが良かれ惡かれ遠い時代の母なり姉達の殘した文化の跡で、決して發明ではございませんでした。五戸地方では今でもよく「火こ賜れ、の時からの隣同志」といふ言葉に親しんで居ります。東北のエヌシ、沖繩のヤンヌシ、喜界島のヤノトジは共に、家を管理する「家主」のことであつたと申します。東北では近頃まで火留めの役は女でございました。南島も亦同じときいてゐます。又篭取りの思想は遠く大家族制度時代の面影と申され、北にも南にも殘つて居ります。火の管理、神々の祭祀は琉球も亦東北も女性の主婦權繼承によつて其地位を獲得されてゐるのでございました。氣をつければ

斯うした同じやうな習俗が國內至る處に散在してゐるばかりでなく、遠く離れた南と北に一致の多いのは、私達には注意すべき點かと考へられます。祖を見るやうな「火こたもれ」のなつかしい言葉は、しきたりや慣はし抔と一緒に、千年も前に懷抱かれたまゝ、姉や兄に運ばれて、或は北に、或は南に、別れ〳〵になつたのかも知れません。若し今後篤志の方があつて、日本の女性の文化史を究められることがあるなら、今も猶斯うした古風な習俗を守つて、昔の姿を其儘に、つゝましやかに保存して來た女性の爲に、遙かに辿つて來た是等諸々の文化の跡を正しく明かにして頂きたいと思ひます。

終りに、嫁が輿入れして主婦となり、次いで隱居に至るまでの行程を、家の間取りから覗つて見ますと、先づ嫁入りすれば、臺所のヒヤ（或はフイヤとも）に入り、主婦になつてコジヤに入り、隱居してハナシに入る順序となつてゐます。ハナシと



いふ語は多分ハナレといふ語と同じかと想像してゐますが、よく究めて居りません。尚花嫁が輿入れの時に持參して來るキビチは其都度其部屋に移され、死んだ時には這入つて行くとも言ひます。

村の女性

一、あぐり哀話

あぐりは戸來村田中の農家に生れた女兒でありました。實名をつやと謂ひましたが、村の人達は普通あぐりこと呼んでゐました。それには譯があつたのです。

あぐりの母は十六の時に、山一つ隔てた後川目の村へ嫁に行つたのですが、半年もゐない中に實家戀しく歸つて來ました。其時は既に姙娠してゐたらしいのにそれとも知らず、氣のつくやうになつてからも、兩親始め誰もが先方へ掛合ふでもなく

暮す中、月満ちて女兒が生れ、其儘にもして置かれなくなつたので、兎に角相談をしたら、知らぬといふ返事でありました。是も亦仕方なく其まゝ子供は祖父母の許で育てられました。さうして周圍の人々から、あぐりこと呼ばれて可愛がられてゐました。あぐりといふ名は此地方では、斯んな場合に氣輕につけて呼んだり、呼ばれたりしてゐるやうでありますが、他所の地方では末子の命名に多いときゝます。

あぐりの母は、其後再婚して家を去り、子供は爺婆のいつくしみで成長しました。

あぐりが小學校に通ふやうになつて、三四年生の頃、或日學校からの歸途、村では見慣れない中年の男に出逢つて呼び止められました。男は馬を曳いてゐましたがそれは計らずもあぐりの父でありました。彼は申しました。「私はお前の本當の親だが、お前の母がつれないくて、家に歸つた切り再び私の許へ歸つて呉れなかつた。若い私は其が腹立たしくて、自分の子には濟まないと思つたが、若し知らないと言

つたなら、歸つて來て呉れるかと思つたら、たうとう歸つて來なかつた。どうか悪く思はないで呉れ。私はお前の本當の父だ」と謂つて、涙を拭きながら懐中から財布を出し、五圓札一枚與へて、「是で好きな物でも買つて呉れ、」と、取らないといふのに手に握らせて泣きながら別れて行きました。あぐりは、其札を手にして田中へ歸つて來ました。田中の里の入口には川があつて土橋が架つてゐます。其橋を渡つて家に歸るのですが、彼女は橋の上まで來て立ち止りました。此まゝ此紙幣を持つて家に歸へれば、爺婆に叱られるのが極つてる。思案に餘つて橋の上から、其札を川の中に投げ込みました。可憐にも彼女は水に流れる札を眺めて、目に涙を一杯溜めて家に歸つて來ました。

小學校を終へる頃は美人の評判を受けるやうになりました。其頃から村にゐることを好まなくなつて來て、爺婆の言ふことも聞かずあこがれの町八戸へ出ました。

其處で始めて酒場の女となり、轉々として廻り歩く身となつたが、心に副はなかつたと見えて、暫らくする中、或物持の年寄りに引き取られて世話になるやうになりました。それからは村にも歸らなくなつて、幾つかの春秋が過ぎました。其中に彼女が若い自動車の運轉手と馴染んでゐるといふ噂が村にも這入つて來ました。それから間もないこと、北の國では既に夏も終る九月頃、程近い十和田の湖に若い男女の死體が上り、互に帶で體を結び合せてゐたといふことでした。それがあぐりの最後でありました。あぐりは其時二十四五にもなつたでありませうか。村の女達は、ほんとうにつみつくり（可愛相）なことをしたといつて憐れんでゐました。宿命的なあぐりの名よ。彼女が流した札は、何處のしがらみに止つてゐることでありませうか。私が田中の里を訪づれて始めて土橋を渡つた時には、夕暗の中を濁水が流れ川岸の楊の枝を壓してゐました。

二、八重女の山歌

菜の花や蟬の聲きくみちの湖

名匠河東碧梧桐翁が十和田湖に來遊した時に詠んだ句と聞いて居ります、私が始めて祖父に伴はれて十和田の開墾地へ行つたのは、十九の年でありました。五月の末方で、もう里には梅や桃櫻も散つて氣候も暖かく、梅の實などはどん栗の位に大きくなつてゐました。戸來の村を過ぎて、輕井の澤を上り、十和田山の長根にかゝつたら、街道には雪が積つてゐました。原始林の木々は山麓から徐々に新芽を吹いて、まだ山上の方は色づきもしてゐません。その中に山櫻の大木が混り、漸く開花して白い雪のやうにたなびいてゐます。長根を下つて地の底に入るかと思はれる程下り詰めたら、宇樽部の部落に入りました。登地で一方には湖水が目の前に迫つてゐます。梅と桃が眞盛りで、畑には一杯菜の花が咲いて春は正に酣であります。其花の中から里山では聞いたことのない蟬の聲が、かまびすしく啼いてゐました。名匠の句を口ずさんで十和田の春の美しいのに見とれました。

祖父の家には女達に混つて一人の百姓の娘がゐました。皆の服裝とは異つて、萌黄に染めた麻布の腰切りに同じ股引を穿いて、同じ長目の袖無を着、頭には手拭を被つてをり、又其上に紫の三角ボッチと稱してゐる被物をしてゐました。北の國の女達はもう十四五の娘になれば、必ず此樣な服裝をして働いてゐます。三角ボッチは年老いても夜晝頭から取ることがありません。此娘の名を八重といつて私より一つ年下の十八で、山の中には珍らしい美人でございました。母親がなく父の辰に育てられてゐましたが、其父の處へ、何處から來たか村に永く居る者で、人々がおんばと呼ぶ老女が何時の間にか後妻に入つてからは、兄の太郎夫婦が別居し、又八

重には網といふ怠け者を婿に貰つて來ました。八重は網の愚鈍な性質と間拔けた容貌を日頃から大變に嫌つてゐたので、婿が來るなり私の祖父の處に來て了つたといふことです。

私と八重は仲良しになりました。十和田は山の物に惠まれた處でございます。春はしどけ、ほうなや蕗にうど等いろ〳〵の青物があります。八重は祖母と毎日のやうにそれ等を採取して來ては、勝手元を賑はしてゐます。秋になつてからは茸を澤山採つて來てゐました。或日私も八重に伴はれて、山葡萄を採りに行きました。里山の物と違つて大葡萄といつて粒が大きうございます。八重は木の上に上つて採りました。彼女は歌が上手で盛んに美聲で唄ひます。此地方の山歌といふ歌で私などにはちよつと眞似が出來ませんのに、山を震はす如くに唄ひました。

おらも行きたいあの山越えて

久し振りだと言はれたい
思ひ思はれ親さまきかぬ
ならば首尾よく貰ひ受けたい

彼女の唄ふ歌は、今は忘れましたがみなこんな歌ばかりです。さうして私に返しを唄つて呉れといふのでした。私は唄ひませんでした。併し彼女は間違つてもよいから唄へと申します。山歌は必ず返しがなければならないと見えます。私が唄ふと山歌は唱歌になつて困ります。それよりも私は、斯樣な歌を口にしたことがない爲に、山の中ではあるが恥かしくて仕方がありません。私は彼女にお前は、何故唱歌を歌はないかと問ひますと、八重は唱歌は私達が歌ふものでないといふのです。それで私がいくら教へやうとしても歌ひません。町風な言葉を教へても言へないのです。彼女は町風な言葉をいふのが恥かしいのです。併し八重は私よりは確にませて

ゐました。或日、彼女は私に此様な話しをしました。

私の父は後妻に騙されて、綱のやうな者を婿に取つたが、私は綱が嫌ひで旦那様の處へ來ました。あんなことをせずに、私を嫁にほしいといふ者にやつて呉れゝばよい、私も行きたい。といふことでした。私は驚きました。こんな娘が自分でどうして結婚の問題等をいふことが出來るのかと思つたのです。だが八重の心は綺麗でした。彼女は兄嫁の弟の市を慕つてゐることが分りました。山歌の意も解されました。市は、十和田の山を越えた戸來村の者で、木挽で是も美男でした。

それから間もなく、私の家から八重の姿が見えなくなりました。私は物淋しく思つてゐますと、村に市が來たといふことでした。八重は市の迎へをどんなに待ちわびたことでせう。二三日してから村の百姓が、長根で二人に會つたといふことでした。市は大鋸を肩に掛け、八重は腰切に股引を穿き、赤いめりんすの伊達帶を前で結び、紺絣の前掛けをあて、まかないを羽織り、生れ故郷を後にして、道を三戸へ取つて落ちて行きました。それからもう三十年は過ぎました。此間私が郷里へ歸つた時、或處に行くべくバスを待つてゐたら、中年の男が來て私に挨拶をしました。私は久しく會はないことゝて忘れてゐましたが、此男は十和田の者でした。村の人人の消息を澤山きゝましたその中で、八重のことが氣になつてきいたら、八重は市と一緒に今は十和田の山中で炭燒きをして暮してゐるといふことでした。私は老いた今日、鴛鴦の契りといふ言葉をなつかしく思ひ出しました。

三、引出し婿

郷里でたまたま相會した遠方の從姉達が、或日母を中心に炬燵に當りながら昔話の談笑中に、私はゆくりなくも「引出し婿」といふ言葉に聽耳を立てました。何のこ

とかと思つて聞き直しましたら、それは皆の叔父、私には祖父の末弟で末藏といふ大叔父のことを、からかつて謂つてゐる言葉でした。やがて二十年餘りにもなる前に亡くなつた人でありますが、それをまだ末藏オンチャマと呼んで笑ひ話の種にしてゐるのです。

此叔父が子供の頃から、叔父に當る酒屋の家で育てられ、末子だつたので二十歳ばかりで八戸の町へ婿にやられましたが、幾月もない中に實家に戻つて來ました。すると直ぐ八戸から迎ひを受けて戻つて行きました。それが毎々のことになつてゐましたが、或時、此叔父が養家の小僧を一人伴れて、當時兄の開墾地である十和田の字樽部の家に行きました。二人は翌日から毎日たゞぶら〳〵と遊んで暮してゐました。始めの中は氣にも止める者もなかつたが、餘り滯留が永いので不思議になつて、兄が何か用でもあつて來たかと訊ねました。叔父はそれには少しも答へず默つてゐるから、逃げたことが分り、早速人をつけて五戸へ送らせました。叔父は五戸へ逃げるとすぐ迎ひが來るから、五戸へは寄らず、三本木を經て十和田へ行つたことが始めて分りました。八戸の養家では又五戸へ行つたものとばかり思つて、迎ひを五戸にやつたら居ないので、大騷ぎの最中に着いたといふことでした。そんな風で何べんも出たり入いつたりする婿を、此地方では「引出し婿」と謂つてゐました。それでも妻女の兄に可愛がられて、女兒まで儲けましたが、年の行かないせいでもありませうか、とう〳〵里方へ歸つて了ひました。

すると今度は知る人があつて望まれて、二戸郡の方に又婿に世話されました。其家は舊家であつたから古風で、舅が煩さい質の人で、醬油屋でありながら、商賣を覺えさせるといふたてまへから、笊だの杓子だのを持たせて、岩手縣から青森縣まで市を掛けさせました。福岡、金田一、三戸、五戸(共に舊南部領)と次々に市を追

つて歩きましたが、何處でも商ひにならず、酒ばかり飲んで幾日も歸りません、終ひには迎ひを受けることが珍らしくありませんでした。

五戸の市へ來ては、實家の小僧達ばかり市場に出して商はせました。町使ひに出た人達はそれを見て皆笑ひ、一人も買ふ者がなかつたと謂ひます。そんな風で度々それを繰り返すばかりだから、五戸の實家では「外聞が悪い、もう市には出すな、未だの品物は買占めるから」と、算盤を取らせたら、馬で一駄の荷は全部で三圓何十錢とかあつたと申します。今から見れば金の價値の高かつたことを思はせます。斯んな風で叔父の商賣實地見學は失敗ばかりしてゐますので、それからは養家で市掛けを止めさせたと謂ひます。私の母が、叔父の持つて來た笊だの箕杓子だのは、隨分後までも倉の隅に轉つてゐたと話してゐました。從姉達も、あのオンチヤマの箕笥と長持は何遍家に戻つて來たか知れないと笑ひました。併し、出戻りの叔父は

歸ると大きくなつて、伴れの者達に酒を飲ませ、その上きまりが悪がるのに、泊れ泊れといつて泊めてやつたといふことでした。

叔父が斯うしてゐる中に子供の四五人も生れましたが、よい年をしながらたうとう養家を出て來ました。私の十一二の頃、「姑息因循」といふ言葉を覺えたのも、此叔父が母に宛てゝ送つた舅を評する手紙の文句でありました。其間に長女が師範學校を卒へる頃、母と二人で叔父を迎ひに來ましたが、歸らうともせず、それからも方方と歩いて居りました。又其中に養家では、舅が亡くなり長女までが亡くなりましたので、それからはさすがに心も變つたか歸る氣になつて、妻女から送られた新調の着物を着て歸つたのを私も知つてゐます。其後長男に嫁を迎へ、孫が生れてよい爺になりましたが、元々體が弱い方で長生きもせず亡くなりました。其時に、死亡の通知が五戸の家へ來ましたが、もう一通の電報があつて、それには叔父の戸籍を

送れといふのでした。入籍せねば長男が喪主となつて葬儀が營まれないといふことでありました。

斯様に始終、出たり入つたりばかりした婿も又とないでありませう。「オンヂと、星の糞ア（流星の方言）あれなかれ」と、投げやりに謂はれる此地方の諺の如く、昔の次三男に生れた人達の運命は悲しくも仕方がありませんでした。四五年前私が此叔父の家を訪づれた時、今は老いた叔母は其昔の苦勞も忘れて、孫達と一緒にお ぢい様おぢい様と祖父を懐しみ、心の綺麗な人であつたと賞めてゐました。妻子の情は又美しいものであります。

四、醜くい婿

家附きの娘に養子を迎へた者を、此地方では「婿とられ」と申してゐます。此話は カマド（分家）のおばあさんから聞いたのですが、此人は八戸から十六の時お嫁に來た子福者で、明朗な性格で笑はせ役の上手な人でありました。

早い頃のこと、八戸の某舊家に男の子がなくて、一人娘に在方から婿養子をしました。八戸は城下町で其に濱を控へてゐますから、中々繁華な土地で、言葉も動作も又人々の容貌までも綺麗な處です。在方では等しくあこがれの土地となつてゐます。それだから八戸では在方衆を「在郷太郎」だの「山根太郎」等と異名してゐるのは、東京でお上りさんなどといふのと變りがありません。

この花婿は在から來た人だから、多分開けない處があり垢抜けがしてゐなかつたでせうが、其上に器量も良くなかつたらしく、若い美人の花嫁はこの婿が嫌ひで、仕方がなかつたらしいのです。何よりも困つたのは目もとに見る婿の顔でありました。見たくなくて仕方がありませんから、或日祖母の許へ行つて相談をしました。

「おばあさんアンタサン(商家中流以上の夫の稱呼)の顏が見つともなくて仕方がありませんが、どうしたらようございませうか」と訊きました。おばあさんは事もなげに「そんなら顏が見える時に、お前が前ぶり(前掛)を被ればよいでせう」と敎へられたといふことです。孫の花嫁は頷づいて祖母の許を去りました。前掛を被つたかどうか分りませんが、其後は何のこともなく月日が經つて、子供が生れましたが、一人娘であるだけに我儘でもあつたでせう、婿には「子供は私の子だから手をつけるな」と謂つて笑はしたさうですが、次々に何人も生まれる頃には彼我の爭ひもなくなつて笑えたといふことですが、今は二人とも存命してゐないと申します。

五、泣き出した花嫁

此話も矢張り八戸のことで、某家の先々代とか長男に嫁を迎へました。十五六の花嫁は子供であつたせいか、夫君は大變に嫌つて決して同室に居なかつたと申します。夜などは敷いた蒲團を自分の分だけ、さつさと丸めて抱へては幾つもある部屋の離れた方へ持つて行つて、一人でさつさと寢て了ふのでありました。すると花嫁は蒲團を抱へることも出來ず、する〳〵と幾間も引摺つては其後を追つて休むのでした。夫君はそれが頗さくて腹が立ち、どうしたらよいかと考へて、今度は押入れの中に入り、開けられぬやうにツメを掛けて、之なら大丈夫と思つて寢てゐました。時經つてから又花嫁が蒲團を引摺つて入つて來ました。座敷の中には見えないので押入れを開けて見やうとしましたが、どうしても開けられませんので、とう〳〵悲しい聲を立てゝ泣き出しました。彼女はお嫁に來る時には、父母は勿論のこと誰もが、良く務めよ、つらいことは堪へよ、二度と歸るなよ、と、赤灰を、出た戸口に撒かれて送られて來てゐるのです。もう父母の家は自分の家ではありません。彼女

の胸は張裂けたのでした。それを聞いてさすがの夫君も可愛相になりました。それから後はつらくあたらなかつたと申します。さうして後の語草に、「とう〳〵これ（妻）に負けた」と。

六、娘に申譯がない

親心といふものは複雑であります。五戸の隣村に倉石村といふ處がありますが、或農家に娘がありました。今でもまだ三十にならないかと思ひます。此娘が十八の年嫁入りしましたが、嫁入り前のこと、家では兩親始め皆心配して早く嫁けないと年寄嫁になると謂つて騒いでゐました。村々の風習では小學校を卒へれば先づ叔伯母達が、「嫁に行く時ア、私達だつて、赤い着物の一枚も買つてやるが、」といつてやさしい言葉もかけて呉れるし、家でも今様の着物を買つて貰ふことが出來ました。

それが何よりうれしくて娘達が其氣になるのです。在方では晴着は嫁にでも行く時でないと貰つて貰へないからであります。

其娘を、或人の世話で隣村戸來村の後川目に住む農家に、やることに約束しました。どんな家で、どんな人物かをも一言も聞かず、猫の仔でもやる時のやうに承諾しました。さうして婚禮の日には父と叔母とが連れ添つて丁度昔話のおり姫この嫁やりのやうに、迎ひの馬に乘せられて行きました。ところが行けども行けども果てもない遠い山奥です。着いた時はもう夜中で、父も叔母も餘りの遠さにいふ言葉もありませんでした。

家に入れば仲人の話しとは相違して、婿は既に三十四五歳にもなつて、其上子供が二三人もゐました。父も叔母も之には困りきつたが、今更致し方もなく娘を置いて歸つて來ました。其後家では心配して、毎日、娘が居れないと謂つて歸つて來る

かと待つてゐましたが、一月たつても歸つて來ないので、父親が娘に申譯がないといつて、或る日馬を曳いてあの山奥の村の婿の家に、娘を迎ひに參りました。

迎ひを受けた娘は父親に斯う申しました。「何處へ行つたつて、そんなに良い處ばかりもないでせう。此家は暮しに困ることもないし、それにヤマ(耕地)が近くて働くにの樂だから歸らない」と。父親は又だまつてから馬を曳いて歸つて來ました。父親は娘の言葉に安心もしたでありませうが、又かなしみに似たさびしさもあつたでありませう。此地方の女は人の子を育てることを厭はぬ風があります。

七、鬼のたまご

定男の妻は十九の時に、野澤村荷鹽井の定男の兄の家に嫁に來たのでした。當時兄の財產が可成あつたのを、百姓を嫌つて馬喰をして財產を減らしつゝありました。定男の妻は村でもほめられ者の稼手で、嫁に來てからもよく働きましたが、秋になつて收穫しても、兄が皆賣つてしまふのでいくら働いても其甲斐がありませんでした。或時定男に妻が。「私はいくら働いても、ダダ(家長の稱呼)が皆投げて、働き力がないから駄目だ、もう稼がない。」と歎きました。すると定男が泣きました。さうして謂ふには、「なんぼ投げても、兄だ人ア兄だ、そんなことを謂ふものでない。働いて呉れ」と。其言葉には妻女も返す言葉もなく、相變らず働きました。

其話を後で、兄が聞いて。「定男アアッパ(既婚の女)、あれア鬼のたまごだ。定男に勿體ない。」と、いつて弟嫁をほめてゐました。事實定男は、意氣地が無いのに、飲みぬけ(酒飲み)で人ばかりよい爲に稼業にはならない人物であります。現在では別家になつて居ますが、定男を妻は當にせず、又少しも爭ふことなく、今では四五人

の子供を抱へながら、一人で働いて暮してゐます。さうして貧乏しながらも、定男の妹等がお産にでも歸ることがあれば、二ヶ月居つても惡い顏一つせずに、よく世話をしてゐます。それを世の常の義理と心得て些も重荷とすることはありません。「鬼のたまご」とほめた兄の言葉を、どう解すべきでせう。

村々は今尙昔ながらの家族の結合の上に成立つてゐます。此美しい心情はどうして他所からの借物でありませう。又附燒刃でもないのでございます。必ずや古來の風習、即ち、斯うした物の考へ方、心の持ち方が日本の國の人達には古い昔からあつたのでありませう。今日謂はれる「日本精神」といふ言葉が、或は此樣な傳統の心の持方といふのではないかと思ふのでございます。

八、亭主は替へられぬ

三郎爺には子がないので女房の姪を養ひ、婿養子をして後を繼がせましたが、それ達にも又子がなくて、兄弟の子の女兒のやすといふのを貰つて、幼兒の時から養つて置きました。三郎爺も婆も年老いて死んで了ひ、やすも又子守だの女中だのに永い間やられてゐましたが、年頃になつてから、家で婿を在方から迎へ、二人に百姓をさせました。

在方の者は町方に比して、言葉遣ひや行儀などの惡いのは致し方もありませんが、此婿は怠け者である上に、大酒呑みであつたので、勇姑には少しも信用がなくて、つい離婚することになりました。

此人達は町の某家のナガヤでありました。ナガヤといふのは他地方の名子に似た地位の者で、一言でいふならば旦那に對するケライといつた方が分りよいかも知れません。始終旦那の家に出入して使はれ、旦那の家の田畑を耕作してゐました。斯

うした間柄だから、何事があつても主家へ相談するのでした。やすの結婚の時も、やつぱり挨拶がありましたが、其時に主家の内儀からやすに餞けの言葉がありました。内儀を此地方ではおがさまと敬稱します（此地方ではさんといふ語を餘り用ゐません）。やすは今自分達の運命が決められる時、ふと其時の餞けの言葉を思ひ出しました。「やす、養育された親の恩も忘れてはならないが、亭主を持つたら、よいの悪いのといつて二度と替へるやうなことはしてならないよ」と。

彼女は兩親の前に手をついて言ひました。「育てられた恩は忘れないけれども、あの時、私が、おがさまに謂はれた、亭主を二度替へてはならないと。私は、ダダ（自分の主人を指した）がよいといつても、悪いといつても、縁があつて添ふた者だもの仕方がないから、私も一緒に出て行く。」と。やすは決して利巧な女ではありませんでしたが、其言葉には養父母も仕方なく、婿の離縁も沙汰止みになりました。

麻絲さがし

一

女（なご）ア麻絲さかさなニば、蛇（じや）になる

郷里青森縣五戸町近在、藤坂村藤島で老人から聞いた話でありますが、方言さかしといふ語は物を取扱ふこと、で即ち麻絲の作業をすることが、麻絲さかしでございます。何故に麻絲を扱はぬ女性は蛇になるのでありませうか、今はたゞカラヤキ（怠け者のこと）になるのを戒めた言葉のやうに考へてゐます。麻絲を扱ふ人は、昔

から女性に限られてゐたもので、聖なる神に捧ぐる衣は、特に清い乙女の織るものであつたと謂はれてゐます。それは昔話や傳說からも窺ふことが出來ることで、日向の國西國東郡寺田のりうご淵には、樵夫が斧を水中に落して取りに行つたら、美しい姫が機を織つてゐて、落した斧を返して呉れました。尙其時に歸れないだらうといつて梭を貸し、上に出たら其梭を水中に投げ入れ、必ず後を見るなと敎へられました。樵夫は水の上に出てから、ふと其禁を犯して後を見ました。するとそれが蛇になつてゐました。さうして同時に自分の家も燒けて了つたといふことであります。機屋のタブーは神代の昔からありました。私の聞いたたつた一つの諺も、或は其由來に一脈通ずるものがあるかも知れません。昔の人の生活は信仰に基因する處が多かつたと申します。扱はねば蛇になる程怖れられた麻絲に對する觀念は、又日常の生活にも多く見受けられる處で、神事には麻は缺くべからざるものゝ一つ

麻絲さかし

であることは、皆様も御承知でありませう。其他此地方でヤドコと稱せられてゐる家普請の時にも麻絲が飾られてゐますし、女の大厄と謂はれる出産の時には、麻絲で鉢巻をすると産が輕いと信じられてゐます。又ソリデ（空手）になつた時には腕首をそれで結ぶとなほると謂はれたり（五戸地方）、死者の衣を麻絲（或はからむし）で縫つて着せてやると、極樂へ行く（三戸地方）と、謂はれたりしてゐます。此様に呪力を持つ麻は、此地方の農業行事の上にも亦、偉大な役割を負ふてゐました。私は先づそれ等の事柄に注意して見ませう。

雪深い北の國では、大方は舊暦に依つて、年中行事が行はれてゐます。年始めの正月は大正月と小正月に分れ、大正月は男の年取、小正月は女の年取となつてゐます。此小正月はどういふわけか、年の中でも一番大切な數々の行事が行はれてゐます。今爰で必要な麻のことだけを拾ふことにして見ませう。

女の年取は在方は十五日（町方十四日）で、此日はえんぶりと稱する祭りの舞踊などもありますが、年中行事の盛儀の中でも一番人々の待ち佗びる行事で、それを見物に行くので年取の膳にも早目につきます。此日は儀式が中々多く、先づホガ／＼といふ祝事があつて、其後に田畑の耕作の眞似事を行ふのでありますが、それは裏庭の雪の上で女達がする所作で、田に見立てた所へは、松の枝を苗として雪の上にさします。畑の分には豆殻をさしたりするのですが、麻の豐穣を祈つては、オガラ（苧殻）を折つて雪の上に挿し、口々に「今年ア麻がよい」と謂つて譽めることを忘れません。又次には同じ正月行事の、烏に餅をやる日がきまつてゐて、大抵正月の十一日の朝に、家々では早朝から餅を燒いて、手に手にそれを持つて家の裏に出て烏を呼び、ちぎつては高く投げ上げますと烏はそれを取るのです。此朝は又別にトシ

ナ(年縄)を長く編み、其先に軒下に釣してある古いツマゴ(雪靴)か、馬の沓等を結びつけて、高い木の上に投げ掛けて下に垂らし、是を麻絲だと謂つて長く下がるのを「麻が成長やうに」などといつて喜びました。

斯うして、麻の豊作を念じつゝ、春の耕作期を待ち、八十八夜の「種おろし」が過ぎれば、苧種が蒔かれます。此畑をオッポといつてゐます。此オッポが又おもしろいことには、村に住む者が、村の集團の生活を妨げる行爲をした時、例へば盜みをしたり、手前勝手な振舞をしたりした場合には、村ハヂキといふ制裁が行はれて村人同志の附合から除外されましたが、其者に加へられた制裁が、「オッポをこぐ」といふ掟でありました。此地方でこぐといふことは船を漕ぐといふやうに、物の中を滑々々々に歩く事をいふので、水中を行くことも水をこぐと言ひました。

衣食住は人生の中で最も大切なことでございますが、食にも況して衣を大切に考へたことは、古い昔の思想でございませう。其大切な苧畑を村人達に踏み荒らされることは、必要以上に又大きな不面目であつたことでせう。麻の持つ呪力は愛にも及んでゐるやうに思はれます。

苧の收穫は二百十日過になります。長く置けば絲は粗惡になります。それ故種は別に栽培されて大豆畑などに立つて居ります。此苧種の收納は山(耕地)仕事の終了を意味して、それからは女達にも少しのゆとりを與へられるのでありました。

先づ秋の刈上げが終つて後、田からは稻を畑から畑のものを全部家に運び終れば、最後に苧種を莚に包んで背負つて來ます。此苧種の收納を殿に耕地作業が終了しました。是をヤマジマヒと申します。村の人達がヤマジマヒの終つたのをうらやむのであります。

農家では是を境に女達は、仕事着のミヂカを脱いで、長衣裳に着かへられ是から過度な仕事もなくなつて來ます、さうして女達は體も樂になり針仕事も自由にされるやうになります。それからは家の中の作業で稻扱や粟稗などの穀物を落せば、やがて秋シマヒになります。是で收納も終りますから、嫁などは秋泊りといつて、里方に歸ります。此頃から女達の麻絲さかしが始まります。さうして年の瀬の近づく頃までも里方に居つて歸へるのであまります。

此地方の子守歌に

あつばはアクドさ　粟苅りに
てではテンコさ　舟矧ぐに
婆は隣さ　絲繕りに
爺は隣さ　よぢよ繕りに

娘は向ひさ　かわ返ニしに

女といふ女はみな此歌のやうに、夜も日も絲をさかしてゐます。

絲さかしの作業は極めて細かい仕事で、中々暇が入ります。先づ麻を煮て絲を取り粗惡な外皮を除いて紡みました。良い品を織らうすれば、絲を細かく紡がねばなりません。それを昔はヒラハタシといふ機にたてました。坐つて織る機で、一方は柱に結び、一方を腰に結びつけて織りました。さうして曲尺三丈三尺の麻布を織つたと申しますが、良品を織らうとすれば可成りせいを出さねばなりません。それを六十の梭に通して、若い娘達が織る時は、うれしくて胸をとどろかせたといふことです。さうして織上げた布を着るのが勿體なくて、キビツ（箪笥以前の着物入）の中に入れて時々人に見せびらかし、三年位も取つて置いたといふことでありました。さうして後から目星しい祝儀にでも招ばれて行く時に着るツヅレとしたと謂ふ

ことでありますが、此話を八十になる老婆が話して、「昔の人達が、まあそんなノノ(麻布)を、おかこひつづれにして喜んだものです。」と笑つていつた老婆の言葉に、私は「ほんとうに、ねー」と答へましたが、それは決してさげすみの合槌ではありませんでした。

ノノばかりしかなかつた其頃は、帯もノノで、是を織るには梭の巾の廣いものを用ゐて織りました。女の腰巻は絞りに染め、風呂敷からボッチ(被り物)、袋、脚胖腕抜、手拭、前掛、股引に至るまで麻布であつたのは不思議でないことで、私達は蒲團といつてゐるものまで、オワダと呼ばれ、麻布ばかりの何貫目もある布を使用してゐたのであります。長衣裳などゝいふ新語が、百姓の口から出るやうになつたのは、村々に木綿の入つた頃からであらうと思はれますが、それまでは麻布のミチカを着て股引を穿き、其上にマカナイといふ羽織より長い着物を羽織つて嫁入りをしてゐたと申します。所謂、自給自足時代の村々の生活は、女達の仕事の多かつたことを想像させられます。それ故に女達は、麻絲を作るに少しの暇も怠つてゐられません。夫に子に着せねばならぬ布も尠くないのです。夜なべには圍爐裡のそだ火を圍んで絲紡みが競はれました。「寝べそア溜らない。眠りそア溜る」といふ諺まであつて、是は、居眠りしながらでも一生懸命やらうとすればそ(麻絲のこと)が溜るが、眠いから寝べ(寝やう)と謂つて寝てしまふ様では、一向に絲が溜らない、といふことで、女達が畫の勞働に疲れて爐にあたつて暖を取れば睡魔に襲はれるのでありますが、それでも倘絲を紡む様が目に見えるやうです。

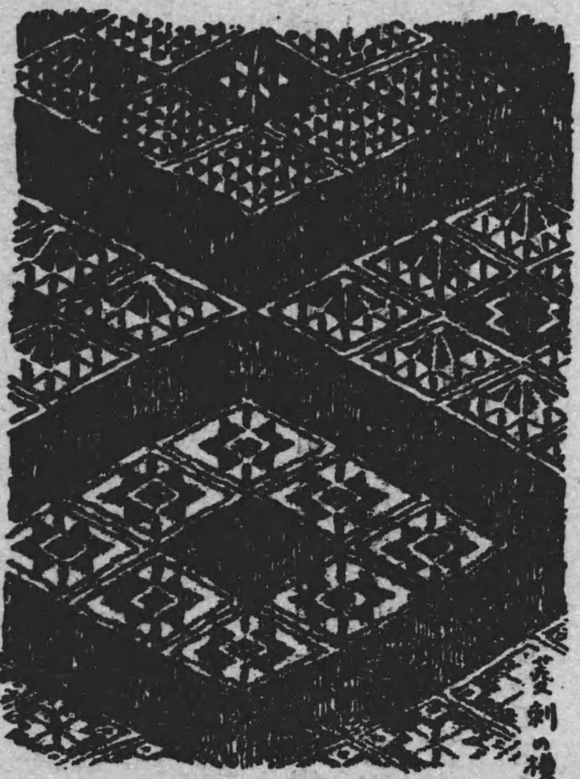
斯うして、長い夜も新年と共に明け、小正月も過ぎれば、繭てニワジマヒも終ります。さうすると、若い嫁達は、「春ア二十日」といつて休暇のやうに再び里歸りをするのでありました。これを又ツブレサシとも謂つて、衣類の手入れや機織をし

て歸るのであります。三月の地土用にはまだ間のある暖かい日に、農家の家の前の日向で、新しい莚を敷いた上で、淺黄色に美しく染つた麻布を手に持つて、嫁や娘達が輝かしい眼ざしで、針を運ぶ樣は、さながら遠い御祖を偲ばせるやうであります。もうその頃は若鶯も里近く訪づれるのでありました。

木綿の魅力

一

五戸地方の昔話の中には、山人等が深山にマダの樹皮を剝ぎに行くことをまゝ語られてゐる。マダとはシナのことださうで、是に就いては、柳田國男先生は御著書「木綿以前の事」の中で詳細に說いて居られます。シナといふ名は、此樹皮が强靱で且つしなやかである爲の名だと、先生は述べられて居ります。五戸地方のことはまだよく調べて居りませんが、或は織つて使用してゐたのではないかと思つて居ります。



けは確かだから、或はマダで織つたのかも知れないが、今もあるかどうかも分りません。此頃では其等の上着用は、皆、船の帆にする純白な厚布で作られて、一つの以前のこと、此地方の山人達や牛方などの山着で、ウシカタバラデ、正しくは牛方腹當といふものがあつて、腰切（仕事着）の上に着る上着や股引の上に穿く半ズボン様の厚布が粗末な織物で、それが麻布でないことだ

流行となつてゐます。

樹皮の採取は其他にも多うございますが、方法及び用途は餘り知つて居りません。葡萄の樹皮は網に綯つて井戸用釣瓶繩にし、マダは火繩にして夜行の時に用ひ、農家の物入袋等が作られてゐます。樺の皮はガンピと言つて、主に夜の魚漁に使ふ松明にしたり、曲物や舟を刳ぐにも用ゐるときゝます。大變強いもので水にも腐らないから、屋根に使用してゐる處もあるさうです。此の木が枯れて、立木になつたまゝ中が腐つてゐるのがあるものですが、樹皮だけは決して腐らずにあります。

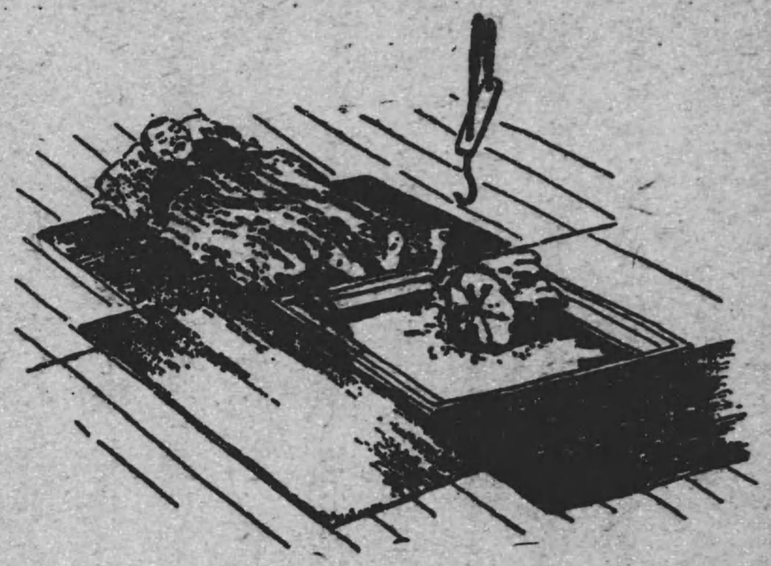
奥入瀬川に沿うた藤坂村藤島は、地名が由來を意味してゐるやうに、昔此邊一帶は藤が多く、一面それで覆はれてゐたといふことでございます。土地の人で七十二になる澤口石老人の話ですが、以前は藤でも着物を織つたさうだが、それは見たことがないと言つてゐました。藤の織物に就ても先生は同書に詳しく論述せられて居

ります。又「海女記」の著者瀬川清子さんの御厚意で實物を一度拜見さして頂いたこともございます。

柳田先生は、フヂは元來は葛類全體の總稱だと數へて居られますが、此地方でも藤には木藤、葛藤、にぎよう藤などの種類があつて、木藤は紫の花房をつけるものを云ひ、葛藤は織物にしたものかどうかよくは存じませんが、コダシといふ籠代りの入物などに、之を用ゐるのではないかと思つてゐます。にぎよう藤は、多分こくわといふ甘い柔い果實のなる木葛ではないかと思ひます。木藤は今も柴薪等を束ねる時に用ゐてゐます。九州地方では藤の代りに女竹を用ゐてグワッソといひますが、此處では何と謂つてゐるでございませうか。此等の樹皮が農家用具になつてゐるのは可成りに多いやうに思ひます。

二

天保年間に刊行された、鈴木牧之の著した「北越雪譜」は餘りにも有名な過去の民俗史ではございますが、同じやうな民俗は亦北の國にもあつて、つい先代の新しい事柄です。私の祖父が西南役前後、今は國立公園に指定された青森縣十和田湖畔の宇樽部といふ處を開墾してゐた當時のことですが、今では昔話にならうとしてゐる實話がありました。祖父は藩のなまり山銀山——宇樽部からは十和田湖の對岸で秋田縣鹿角郡になつてゐますが、ここに深い關係があつて常に鹿角方面を往復してゐたといふことです。或日、大湯村の農家に一泊した處、其家は寢具などのある家でなかつたので、爐の傍でまどろんでゐたら、家人が、寒いだらうと謂つて杉の皮を持つて來て掛けて呉れたといふことでありました。米のなかつた頃には藁もなく筵や叭な



どもなかつたのかも知れません。其頃又十和田山を隔てた三戸郡戸來村の奥山の農民達が寢る時に叭に入つたといふことですが丁度、北越地方と同じ話しでございました。

明治の末近くになつてから死んだ老人に、與手といふ名の百姓爺が十和田の宇樽部に居りました。此爺は戸來村の者で、祖父の開墾事業の有力な協力者の一人でございましたが、爺は終生あの寒い國に居ながら、床といふものに這入らずに終つた者です。いつも爐傍の横座に坐して、根ッこの

火にあたつてゐて、夜になれば其上に長着物を着て、帯も締めず、裸になつて背中をあぶり、腹をあぶつて眠くなれば其まゝ横になるのでした。爺の印象は其光景が一番で、つる〳〵に禿げた頭にちよいと鉢巻をして、煙管を銜へ、背中あぶりの時は、前に着物を肩からかけて、横向きに頭で押へてゐます。目上の人が行けば、一寸鉢巻を取るのが挨拶で、年中穀類は一つも食べず、酒ばかり飲んで年老いて死にました。女房婆が十年餘り前に亡くなつてからは、クサイ(狸の一種)が毎晩婆に化けて來て、爺と爐傍で酒を飲みながら話してゐたといふことですが、或日祖父の家のアカといふ犬が、其クサイを捕つて來たといふ話でした。それ以來與手爺の處へ婆が來なくなつたといふことですが、其頃爺は少し氣が變になつたとも謂はれたと、祖父が話してゐました。氣の毒なことでありました。

與手ばかりでありません。此地方の農民は皆こんなもので、爐の傍へころ〳〵と寢るのはほんとうのことであります。そんな風ですから、十和田から五戸の家に來る百姓達は、座敷へは寢かされず、板敷の寒い處へ一枚づつの蒲團を着て寢かされても、冬でも少しも寒い風もなく、敷物もない爐傍に、ゆつたりと大胡床をかいて坐つてゐる樣は偉大にも見えるのでございます。彼等は天然や自然に對して都會人の想像も及ばぬ程の抵抗力を有つてゐるのでございます。

柳田先生は、麻が唯一の平民衣料となつたのは、中央部に於てもさう古くからのことではないと、同じ書で說かれて居ります。其昔蝦夷の棲むみちのくと稱された東北の曠野へ、文化の移入されたのは、しば〳〵大規模な移民が行はれた後のことで、麻の栽培も亦新しい歷史であらうと思はれます。併し乍ら、麻の有つ民俗には、古風な信仰の、不思議にも深いものがございます。

三

五戸地方の四五十年間に於ける農民の生活の變遷には著しいものがございます。わけても衣料の變遷には注目すべき點が多いやうに思はれます。

農家の寢部屋は一間四方に區切られてゐて、ヒヤ又はフニヤなどと呼ばれてゐますが、大抵は夫婦の寢室に當てられ、其處にキビツ(衣櫃)の置かれてある他は、床一杯藁が敷きつめられてゐます。その上に、ユブシヤ又はオワダと稱せられる、廣く且つ小切れを澤山にあてゝ厚くなつた敷布を敷いて寢てゐます。敷いた藁をクサジと申してゐますが、非常に暖かなものです。着るものとても同樣のオワダを着て寢て居りますが、麻布へつぎをあてたものだから一枚で五六貫位はある重い物で、それをどこでも着てゐました。それが棉花の移入につれて農民達の生活にも變革が生じたのでございました。昔話に、或農家の父親が子に敎へて曰ふには、着てゐる着物にクサジがついてゐても、決してクサジがついてるといふものでない、外聞が悪いから、と謂つて聞かせてたと申します。すると或日のこと、子が父の背にクサジのついてゐるのを見て、「アヤ(父)、お前の背中に蒲團がついてゐる」と謂つた、といふ話は、是又何處にもある共通した昔話と聞いてゐますが、又是にも況した實話が此地方には殘つてゐるのでした。

或る農家の嫁入に嫁の叔母が付添つて行つて、其家に泊りました。此地方の婚禮には嫁入の付添ひは泊るものとされてゐます。九州では反對に付添ひはどんなに遲くなつても歸らなければならないことになつてゐるのは、どういふわけか知りませんが、故ないことではないと思ひます。さて付添ひの叔母は、其夜生れて始めて寢む蒲團の上に、トンと音を立てゝ寢ました。それを同行のオヂヂ(叔伯父の稱)が見

てゐて、「叔母が、當才馬こア寢る時のやうに、トンと肩ついて寢たんだもの、をかしくて」と笑つたと申します。是は屁の中で當才駒が母馬のやうな寢方を知らず、ひよん〳〵跳け廻つてゐて、俄かに寢ようとすると、トンと肩のあたりが敷藁にあたつて音が立つ時のやうだと謂つたのであります。オワダの上に寢るにも技巧があつて、ごそ〳〵してゐては敷物が捲くれて、寢られないといふことでございます。

ユブシマやオワダは綿の這入つた蒲團に變る過渡期の現象と見られます。併し在方に行くとまだ農家では藁に寢てゐるのが普通であります。

此頃から町方では綿の仕入が始まり、篠巻を買つて、絲を紡ぐことが流行しだして、木綿織の流行となりました。私の家などでも、祖母達の手製の太いカンナネが子供の時分までごろ〳〵と殘つてゐたのを知つてゐます。町の紺屋の全盛を極めたのも此頃で、又家々では綿帳といつて綿のいろいろな小切を澤山張りつけた帳面を作り、メクラ綿ネズミ綿アイ綿タキ綿等々の綿の小切れが張られ、それをお互に貸したり借りたりして織つたのでございます。所謂自織綿といつて、今でも老婆達は、嫁入りの時に持參したものだなどと、綿目の細い重く厚い木綿を自慢して着てゐます。

斯うした木綿の流行は、町の木綿屋の數を俄かに增して來ました。五戸町のやうな小さな處でも十軒に餘る木綿屋が出來て、それぞれ筆えて名を殘してゐます。それでも明治の中頃までは在方は大抵は麻衣ばかりで、町方でも麻布は不斷に使用してゐました。主に臺所用で、袋、ふきん、雜巾類はみな麻布ばかりで、木綿切れは用ゐなかつたのです。私のかすかな記憶では、自家用の織物にまで澤山な稅金のかゝるやうになつたあの當時から、麻布が町方の勝手元と緣切りになつて、女達が、ノノがなくなるのでふきんに困ると謂つて騷いだことがありました。ふきんは木綿では器物を拭ふのに水氣が取れないことゝ、弱いのが缺點で、今のスフから見れば

をかしな話しではありますが、當時は女達の大きな惱みでありました。村々の麻の栽培も是を境に作付け段別の減じたのも事實で、以後は肌觸りのよい美しくて安い木綿が、苦勞なしに手に入るやうになりました。さうして次第に收穫が減じ、農家の中には作らないもの〻方が多くなつて參りました。是は近頃の自給自足の奬勵と時局の國策に添ふべく、絲りを戻して麻絲を扱はねばならぬ時節になつて來ましたは、凡そ正反對の結果を齎らしてゐるのでございます。それが、また一二年の中に。農家は再、水の流れに沿ふ如く從順な營みをすることでございませう。

四

私達の今までの常識では、麻布は上織物として夏の帷子で、それ以外は農家手織の仕事着ばかりを考へてゐました。さうして、冷たい麻布を肌着等にするものだと

は迂濶にも氣づかずにゐました處が、或る農家の主婦から、之はジバンだと謂つて單衣の短かい肌着を見せられて驚いたのも愚かしい話です。寒い時には之に裏をつけて着るといふことでした。在方農家の生活は何事に依らず、私達の想像とは可成りの隔りのあることは事實でございます。

在方では大百姓の家の人達でも、町へ來る時は仕事着の腰切りの上に長目な袖無しを着て、其上にもう一枚マカナイを羽織つて來ました。此等の着物はどんな嚴寒でも綿が入れてありません。マカナイは男女に依つて幾分差がありまして、男用は肩に別切れを入れず、淺黄に染めたノノを黒絲で五分位の間隔で刺し、衿と袖口にだけハナ色の木綿をかけてありますが、女物のマカナイは、肩に絣か花色の木綿が入れてあるのが常でございました、此着物は袖はムジリになつてゆるやかで衽も衿もついて普通と變りはないが、たゞ丈は膝下四五寸位までゝあります。女達は此下

に菱刺しの前ぶりをして、他所行きの服装となつたのでございます。此マカナイなどの肩入や半衿に木綿を掛けるやうになつたのも僅か前の流行で、昨年まだ六十七八歳になる老媼達の、華かなメラシ（娘）時代には、町にも二三軒しか木綿屋がなく、半衿と袖口に掛ける覆輪の花色を町へ行つて買つて來るのが樂しみで、容易にはそんなハイカラが出來なかつたといつてゐました。それだから後に袖無しやマカナイなどの肩入に、木綿を使うたのは非常な伊達であつたさうで、それも其筈でありました。近郷に名高い五戸の市日を四五里も離れた在方の女達が、見ない者も澤山に居つたのであります。

つい最近になつてからは、村々の服裝にも急激な變化が行はれて、どんな奥地の國民學校でも、生徒は皆小倉服に運動靴を履いて帽子までちやんと被つてゐます。以前は皆淺黄の麻布腰切りに股引と山草履（足半）といふ出で立ちで登校しました。

女生徒の間にも頭に髷を頂く者もなくなり、洋服が多く着られるやうになつて來てゐます。服裝の變遷は一番に目につき易いと思ひますが、私は爰で村々の老媼達の述懐した嫁入りの昔語りの中から、此地方の衣料の變遷の跡を少しばかり申上げて見たいと思ひます。

五

東北の寒村に箪笥の流行を見たのは定めし近いことでございませう。また六十五六の老人達の話にも、箪笥といふ言葉は使はれず、キビッといふ言葉ばかりあつたのでございました。キビッは衣櫃（きびつ）の意で昔は唯一の嫁入道具でありました。是の中には嫁の衣類は勿論のこと、おはぐろ筐、手筐、夜具までも入れました。併し、キビッは長持よりは小形で、一人で背負つて歩くものであります。衣類と謂つても、

論に述べたやうに、仕事着の腰切りと股引の何枚かと、後はマカナイの二三枚もあればよく、夜具は又現在の夜具蒲團とは似寄りもつかぬ、ユブシマとかオワダ、ネワダの類で、絹布を用ゐない此階級にあつては、是等の衣類は皆麻ばかりであつたと申します。其他手拭から、ボッチ（被り物）、帶、腰卷、以上の外に婚姻の祝立てには三巾風呂敷といふ大きなものが付き物で、是等は皆麻であつたのです。それから婚禮の時のキビッの受取り渡しには亦八釜敷い儀式があつたやうですが、之は別の機會に申上げませう。

木綿の流行になつてから、嫁への祝立ては一躍變つて來ました。サントメといふ反物に空色の紋付か、又はあかとび色などの紋付に、繻子の帶、白足袋等も添へられるやうになつて來てゐます。サントメといふ繻物を私は知りませんが、それに木綿の紋付を重ねました。又メナンブといふものも同樣に用ゐられましたが、今もあ

るかどうか知りません。さうして又、當時の嫁の出立ちは變つてゐました。手拭を被り、其上にボッチを被り、花笠を頂き笠には花染の紐をつけ、花笠には目隠しといつて、茜染を一尺位下げて顔を隠し、雪合羽を着て飾り馬に乗つたものと謂はれて居ります。此やうな正裝の花嫁は在方では上流の農家の娘で、それにいたづらをしようとする若者達は、三四里の遠い道をものともせず、出かけて來て騒ぐ習俗があつたといふことでございます。さうして此地方に這入つて來た茜染は、鹿角茜と謂はれ、秋田縣鹿角地方の産出で、大變美しいものでした。其赤く着飾つた花嫁の美しい姿は、さぞや目が覺めるやうであつたでございませう。これも亦木綿の餘徳でありませう。

此茜染は、赤ん坊の生れた時に扇丈け(曲尺九寸)と言つて産着にされました。麻布の荒い肌觸りと違つて、どんなによろこばれたことでせうか。それだからつい最近まで此木綿の鹿角茜は、オボ祀と稱せらる産の祀に近親から送られる品でありました。

三角ボッチは日常女の頭上に被つてゐるもので、殆ど取ることがありませんが、私達の知つてゐる頃からはもう、唐縮緬(モスリン)が全盛を極めてゐました。是をトチリと謂つて、若い女達は紫、中年以上は黒で、十二三の子供の頃は派手な色を被りました。去年六十六になる横澤アキ女が、十六の時町へ始めてネルが來て、赤い三角ボッチを被つた時はとてもうれしかつた、と話してゐました。此地方で赤いといふのは美の象徴で、たとへば晴衣のことなどを赤いポポ(ポポは着物の兒語)などと申します。此三角ボッチは、風呂敷大の布を少しずらして三角形に折つて被るもので、是を祀立てに忘れたら破談になると謂はれてゐます。さうして又此三角ボッチは、婚禮の杯の濟んだ直後に、同じ席上で姑から嫁に、紅、白粉、元結、髪附油と共に、「祝ひ」として贈られます。又、田植の時

にも赤い腰巻と伊達帯(細帯で前にて締めて置く)と、手拭と此三角ボッチが、嫁に贈られることは前にも申しました。

東北も年々歳々文化の恩恵が浸潤して來て、昔の風習は追々に失はれて來てゐます。三角ボッチが何故に嫁に取つて左程重要な品であるかを私は知りませんが、此頃の祝立には、それが、ハイカラな衿巻に變つて來ました。在方農家の婚禮も其花嫁の出立ちだけは今は都會の風と少しも變りがなくなつて來てゐます。

六

農家を訪づれて親しく其生活を見てゐると、其生活とは似寄りもつかぬ言葉を使つてゐるのに、時々氣がつくことがあります。其一つの例を掲げるなら、女達は綺麗でもないムヅリの不斷着の長着物を、特に長衣裳と言ふことです。此言葉こそは新文物の木綿と並行して移入した新語でなからうかと思ふのです。此地方では着物をキヅケ、又はキカヘリといふのが一般で、キモノとも餘り聞はないのですが、それなのに長衣裳といふ言葉のあるのは異樣に感じられます。長衣裳は、ヤマジマヒ或はノオシマヒ等と謂はれ、農家の收納濟の後に、女達が仕事着のミヂカを脫ぎ捨てて無條件に着てもよい着物でございました(篦渡し參照)。一年間の長い勞働は此衣裳を着ることによつて、解放されたのでございます。其よろこびは、木綿の肌觸りにも似てゐました。裾を長くしてゆるゆると歩かれる心地は、何にたとへられませうか。衣裳といふ美しい言葉は又舶來語にも似つかはしく、其新しい感覺は、香が高く肌觸りのよい木綿を身につけて、始めて味ひ得たことでありませう。

中ノ渡は、元五戸鄕の中でございましたが、今は上北郡四和村の大字になつて居ります。町からは川向ふ一里半離れた、後藤川に沿うた部落で、其處には近隣で有

名な八幡様がありますが、其宮の鍵取りをしてゐる七十幾つかの老爺が、若い頃の話を何よりも先に話して呉れたことがありました。或年の秋、村のタリ（人名。主に末子に命名した）といふ若者が、町へ茸賣りに行く途中、同じ村の一人の老爺に出會つて。「何處さ行く」と爺に問はれ、「町さ行く」と答へました。何を背負つてゐるか、と爺は籠の中にある品物の名をきいたら、タリは「ノノバヂだ」と答へました。ノノは前述した様に麻布のことで、又單にバヂといふと、それは又「ばかり」といふ意でもありました。茸のノノバヂは此地方では深山に自生するもので、上等の茸ではないが雪のやうに眞白く綺麗で、生える處へは一杯出るといふことであります。

爺はタリの背負籠を見て又聞き返した。「皆、ノノバヂだど」。するとタリは「イヤ、手拭と褌ア木綿だ」と。爺は又言ひました。「イヤ、其茸アよ」、タリは「吾ア、畜のことかと思つてさア」と。

方言の有つ言葉の表情は汲み取り難い。此押し問答の意は、爺が、其茸は皆同じノノバヂかと問ふに反して、タリは洒落て自分の着てゐる着物はノノ即ち麻布ばかりかといふ意にかけて答へた、謂はゞユーモラスな會話でありました。當時麻布ばかりを着てゐるのは、新流行の木綿に對して、どんなに引目を感じたことでありませう。若いタリは流行に後れない様に、身につけた木綿を得意に言つて新しがつた

のでございませう。

明治の末頃までは在方若衆達には、黒い頸に眞白いハンカチを巻くのが流行したものでございます。木綿の流行が後のとうちりめんに比すべくもないことは、柳田國男先生も「木綿以前の事」の御著書の中で述べられて居ります。

木綿合羽に　茶の小袖

などと歌はれた戯歌は、當時流行の木綿の魅力を言つたものでございませう。

踊るお庭をどんどと踏めば
一分雪駄の緒こゝ切れた

雪駄の流行もいつ頃のことか知りませんが、木綿の長衣裳を着て、木綿の手拭を頬被りし、一分もする高價の雪駄を履いて、後金をちやら〳〵ならし乍ら踊つてゐる昔のハイカラ男の若い姿も目に浮ぶのでございます。

大百姓と田植

村のオヤ

北の國では、長い間雪に鎖されてゐた村々の農家も、春三月にもなれば、丁度蟻が巣からいつせいに出る時のやうに、竈を離れて野に山に、田へ畑へと出て働きます。又何處の村々にもきまつて一二の旦那衆がゐて、昔話に見るやうな長者の生活をしてゐて大百姓と言はれてゐます。大勢の家族と、又大勢の雇人と、澤山の馬牛を飼ひ、廣い土地を所有して百姓を營んで居ります。

部落の人達は此家を、オヤ又はオトナと謂つて尊敬してゐます。オヤには數多いカマドがありました。カマドとは分家のことで、他の地方ではエッコ、エモチ、シンヤなどと謂はれてゐる家と同じと申します。此カマドには、オヤの直系者例へば長女或は二三男叔父叔母達の分家をしたものと、別に婢僕の所謂、ヤマコと謂はれる人達が分家したのと二通りあつて、婢僕の方は別にケライカマドと稱されました。是等カマド達は共にオヤの隷屬者となつてゐます。

此兩者の關係は今もまだ社會的にも思想的にも封建的な香が濃厚で、カマド達には經濟力の大きいオヤが絶對的な存在である譯であり、又オヤに取つてはカマドの多寡は農業經營上主要な條件でもありました。斯うした家の子郎黨の一團を、五戸地方では、マキ或はスマキなどと稱してゐますが、マキは多分に血のつながりを意味し、スマキは謂はゞ一族を意味してゐるやうに思はれます。是を又「親類スマキ」等とも言ひならはしてゐまして、彼等は事ある毎にオヤに服從し、オヤは如何なる場合も彼等を擁してゐるのであります。春秋の農事は勿論のこと、冬のヤドコ、家請普のことでありますが、是等に見るオヤ、カマドの和氣靄々たる作業の中に協力の實を擧げて來てゐるのであります。是が古い時代の大家族制度の名殘りでありませう。此習俗は年の中でも一番忙しい五月の田植行事によく現れてをります。田植の行事を正月にも況して人々の待佗びるのは、賑やかな作業に伴ふ大勢の會食であります。それだから泣く子達に親達が、「田植が來るだ、今にオヤさ行くだよ」と言つてだましてゐるのを見かけることがあります。

農業の行事には古くから信仰が伴つて居ります。昔は神を祀らなければ秋の稔りがないと信じられてゐました。それ故に神を祭る日は晴の食物を作り神に捧げて人々も共に食べました。晴の日の食物は、常の日には人々の口へ輕々と入れられなか

つたのであります。晴の日の感激を今もまた忘れられないのは、人々の會食の喜びなのでありませう。

大百姓の女達

大百姓の農業行事は、何と言つても大田植でありました。此日はカマドの家から、地頭役として二人は正式に來ましたが、爺婆があれば是も手傳に來ました。兒があれば子守共々來ます。又エッコといふ赤坊を入れる籠まで持つて來るものもあります。其他に又雇はれて來る早乙女達も多數あります。其賑はひは素晴しいもので、六七十人の田植人は一瞬にして前田を植ゑて進みます。此日は山頭の才量と相俟つて、家刀自の氣働きを示す時です。東北地方では家の主婦をエヌシと申しますことは前にも述べました。主婦のかゝる日の責任は又大きく、食物は並大抵の手配では

大百姓の田植

濟まされないのです。朝から大鍋で白飯が炊かれ、晝と夕の食事の間に行はれるコビリといふ食事が大切でありました。コビリは赤飯でありますが、是は大家では大釜で一度に一俵も蒸され、ニギリコといつて小兒の頭位に握つたものを二つづゝ一人分にし、其他煮〆若芽あへ、干鱈、みがき鰊、鯨料理、切干大根、海老等の田植料理を作つて、馳走しました。それ等の世話も一通りでないのに、エッコの赤坊達の世話で大變でありました。大きな臺所の一隅には七八つのエッコが並び、忙

しい最中に此兒等は何の遠慮もなく泣いて、大演奏會を始めます。母親達が田から上るまでは主婦の掛りとされ、内の仕事から外の仕事まで氣を配らなければ、手順が狂ふのです。ですから大百姓のエヌシは相當の敎養をもつてゐなければなりません。さうして斯んな日に所謂「食はせ飲ませ」の出來ない、いやしい心では、大家のエヌシとしての資格がないのであります。

それ故に、此地方の女達は、嫁になつてからも長い年月の嫁住の間に、是等の敎養と試練を經て始めて一人前になるのでありました。それから姑が篦を渡すのであります。大田植の食事は此エヌシの采配で振舞はれるのでありました。

田打ち遊び

大百姓の、農業行事は田打ちから始ります。北の國ではこぶしの花を田打櫻と申してゐます。名の示すやうに、これは農事占ひによる命名で、農家はこの開花を見て田打ちを始めるのです。既に陰暦三月十六日の農神迎へも過ぎて、土士用が來れば一せいに耕地へ出る習ひとなつてゐます。寒明けの八十八日目を八十八夜と稱し、此日は農事始めの種下しで、それが過ぎれば田打ちになります。其事始を村々ではイッサキと申して、農家では此イッサキを必ず主家で行ふのでありました。百姓達はオヤのイッサキが濟まぬ間は、自家の田畑を作られぬと心得てゐます。

春の田打ち遊びは謂はゞ其イッサキで、彼の人達にとつては、是から農繁期に入る前の唯一の慰安の日でありました。此日はカマドの人達は、家族連れで朝から大家に行き、男達は田打ちの眞似事をしました。女達は勝手元で料理の役に當り、子供達は前庭で戲れてゐます。さうして是をば地頭役といつて、一日の遊びを大家でしました。

男達は午前中田に行つて、二島分のことでありますが、是が一人分の仕事量で、それが濟めば大家に歸り、久振りに湯に入り垢を流して、長衣裳に着替へ、後はみな飲みつ食べつ遊びつで、春の一日を過すのでありました。其遊びは獨樂廻し、はんま廻し、笄打ち(ネッキウチ)、凧上げ、綱引、力持ち、相撲取などでありました。是等の遊びは、今は戲技と思はれてゐますが、古い頃は神事で又年占の行事であつたと申します。

女達は專ら大量の料理を作りました。酒は麥酒を作り、甘酒、豆腐、餅、蕎麥、うどんの類で、斯ういふ日の家の勝手元は、雜木林のやうだと申す位、人が一杯ゐるのであります。

花見

部落の田打ちが全部終了すれば、若い男女が部落の同じ宿に別々に集つて花見の宴を張ります。若い嫁達は姑から米や錢を貰つて來て參加し、花見團子といふものを作り、又ごもく飯等も拵へて男達にも馳走しました。男の方でも酒や魚を用意して是も女達に分けました。此地方には定つた娘宿とか若者宿とかといふものも今はないらしく、其遊びの日に適當な家に集るやうであります。花見などといつても、此頃はまだ實は花も咲かず、又山野にも出て行きもせず、斯うして一ヶ所に集ふのは、農繁期に入る前の遊宴でありませう。みなさまも御承知でせうが、三月三日の雛の節句前後には國の至る處に是と似た行事があつて、花見、山見、野かけ、野遊び等と稱せられて、男女打連れて附近の山に登つたり、又海岸近くでは濱へ出たりして、一日遊宴する例が數あることであります。此行事の本來の意は、是も農作に先だつて、必ず守らねばならぬ春の儀禮の一つだつたと申すことであります。

カッチキ山

田植作業の中で一番のどかなのは、カッチキ刈りで、カッチキとは刈敷のことですが、田の中に入れる綠肥のことであります。草や木の新芽を刈取る業でありますが、是を採取するにはカッチキ山に行きます。山は大方入會山で、部落の男女はそちらにもこちらにも多數ゐまして、山の上から谷間の向ふから山歌が歌はれ、お互に顔も見ずに掛合の歌を負けずに歌つてゐます。

聲はすれども姿は見えぬ
蔵に鶯ア聲ばかり

聲のよいのに歌らせて聞けば
夏の柳に蟬の聲

さてもよくたつお前の聲は
銀でのべたかただ立つか

わしの聲さへ銀ではのべぬ
親のゆづりの聲だもの

おらが親達ア心がよくて
聲も身上もみなゆづる

今年始めて粟の草取たら
粟とはぐじやのわけ知らの

歌も唄べし仕事もすべし
歌は仕事のなぐさみだ

春のカッチキ山は自然の音樂堂でありました。腹の底から歌ひ出す美聲は山にも

谷にも響いて行きます。嫁が歌へば舅が返してゐます。歌には老いも亦若いも差がないやうに聞えます。村の人達の年老いて後も聲のよいのは、斯うした練習のあるせいかも知れません。又勞働には歌が附物であることも、此時程適切に感じられることはありません。此歌手達に和して、鶯は谷渡りといふ啼き方をして谷間を飛び廻つてゐます。彼等と競ふやうに。

苗取

よい苗こだ　よい苗こだ
さァさ　取りませう　取りませう
若い衆の勢力で　苗こ取りませう
一本取つては　がァばがば
二本取つては　がァばがば

是は東北地方の正月行事の「えぶり」に先立つて、家々を訪づれる「苗取り」といふ物貰ひの口唱する歌であります。苗取は赤い鉢巻などして手に二三本の苗を握り、笛、太鼓、鐘などの調子で歌ひながら踊つて行きます。

大百姓の大田植も、以前は二三日前から、苗取が始められました、が此作業が一番むづかしいといふことで、熟練した人達が選ばれてゐるやうです。初田植の日には、最初に三把の苗を取り、是をお田の神様に上げ申すと謂つて、家

「苗取」の圖

大百姓の田植

に持ち歸り、には（作業場）に臼を伏せ其上に苗を乘せ、神酒と白飯のニギリコ二つ、みがき鰊二本を渡して供へ、田の神を祭りました。田の神を祭ることは何處にもある風習ですが、この邊の各地ではサンバイサマと申してゐます。サンバイサマを祝はなければ、秋の稔りがよくないと謂はれました。此地方では何故か苗取人が非常に優待され、仕事の合間々々には酒が出たり、又中間の食事の外にオンバコヤスミといふ食事が出されます。此語の意味は解し兼ねます。

大田植

大田植は又初田植一番田植とも申してゐます。此行事は中國地方が有名で、盛大な行事ときゝます。又別に牛が死んだりした時には、牛供養などといつて、牛を飾つて田植をするともきゝました。サゲといふ田植唄の音頭取りが、華やかに衣裝をつけた早乙女達の前に立つて太鼓を叩き、拍子を取つて歌を唄へば、早乙女達はそれに和して唄ひながら苗を植ゑるさうで、中々賑やかな行事だと申します。東北も北の果ての方にはそんな華かなこともなく、最初に取つた三把の苗を一番先きに植ゑ、それを初田植だの、又大百姓の家の田植を大田植といふものだとしか思つてゐません。たゞ田の神に供へた白飯と鰊はタチト（主に男の子がなる苗配りです）が食べてゐます。或はタチトを田の神に見立てたのかも知れません。

此大百姓の大田植に、何よりも重要な役目を負ふのは早乙女でありますが、それをソトメと申してゐます。一番に威勢もあれば人氣もあります。是も亦此地方の正月行事の杁歌の中にある文句でありますが。杁の行事は昔の田遊の神事であることは想像されます。

おら隣りの太郎ァあつば

若ソートメのことなれば
おんどけまはつて　はねまつて
生畦（なまくろ）なんぞさんざんにふたなぎつた

あつぱとは母の意でもあり、又既婚の女のことでもありました。早乙女達が田の中でさんざんにおどけて、田の塗り立ての畦を切つて驅ぎ廻つてゐる樣が見えるやうです。それは田の神を喜ばせることだと謂はれてゐます。今でも處に依つては、早乙女達が田植に泥だらけになつて驅ぐのを吉例としてゐる處もあるときいてゐます。北の國でも早乙女は若い女達で、それだから嫁達は春の里歸りには、田植に着る着物を作るのに餘念がないのでありました。又田植には、姑から贈られた新しい赤いめりんすの伊達帶、手拭、三角ボッチ、腰卷等を着飾つて早乙女になりました。年若い仕事になれない女達は、老巧な婦人達に先を越されて、坪に入れられるとか

又は雪隱に入れられるとかといつて、立往生になり、田の中で自分の植ゑる分を先に植ゑられ、前にも行けず後にも下られぬつらい目に會ひ、泣く思ひをさせられることがあります。それだからお互に負けずと働きました。さうして此日ばかりは女の天下で、口の惡い男達に應酬して大勢のソトメ達が立廻るのでありました。

此忙しい田植も終ひになれば、日を選んでテンノリといふ慰勞の宴を行ひます。テンノリは天祈で、作物の豐穰を祈ることです。此日は部落一同の申合せで四五日間は仕事を一切休み、神を祭り農具を休ませ、耕地へは出ず、長衣裳を着て家に籠つてゐます。若し此禁を犯せば、作物は枯死すると申します。オヤではカマド達や其他の人を招んで慰勞の宴を張ります。又牛馬は百五（寒の明けから百五日目のこと）になれば、馬の血下げと謂ふことを行つて、神酒を上げ、過勞させた疲れをいたはつて、放牧するのでありました。秋までは馬の自由な天地であります。此頃は

五月の節句も過ぎて、ほとゝぎすが空を啼き渡ります。谷間のかきつばたは色濃い紫の花を開きます。

村の食事

一

今や大東亜戦下の非常時局に際して、政府は統制經濟の政策に依り國民に節米を奨勵し、配給米の制度を實施せられました。誠に當を得たことで私達も政府の政策に副ふべく一段と努力致す所存でございます。

其以來、近頃著しく常食といふ言葉や、代用食といふ名稱が用ゐられるやうになつて來ましたが、其言葉は私共には少し遠つた感じが致します。今日常食と言はれ

てゐるのは謂はゞ米一色のことで、代用食とは雑穀ばかりのことのやうに思はれてをります。それは大體からいふと、都會に住んで生産に直接携はることもなく、消費ばかりしてゐる人達には、米は常食でございませうが、一歩農山村に入つて是を生産する側から見れば、大地主でもない限り、大部分の農家は決して米ばかり食べて生活してゐるものではございません。私はここで、少しばかり村々の食事の例について申上げて見ませう。

二

瑞穂國と稱せられる我國でも、始めから國の隅々まで水田のあつた筈もなく、又人々が白い米ばかり食べて生活して居たわけはないと思ひます。前代の遠い我々の先祖達が、其昔に北と南へ袖を別ち、第二の古郷をもとめて移り住んだ當初から、白い米の飯を食べてゐたとは考へられないのであります。

近時農業の進歩につれて、開墾事業が發展し、著しく米の増産になつたと申しますが、それでも國の大半は白米ばかり食べて居りません。さうして田の何倍かある畑作はみな雑穀で、それを誰が食べてゐるかといふことを考へて見なければならないと思ひます。

南の國、南島諸島ではどこも常食は蘇鐵でございました。私共は蘇鐵は觀賞用でお庭にあるものと思つてゐました。九州地方を歩きますと、よく神社や佛閣の境内に大きなものゝあるのを見ます。天然記念物に指定されたものもあるさうです。それが食料だと話されても眞實のやうな氣が致しませんでしたが、澁澤子爵のアチラから出版された、岩倉市郎氏著「鬼界ヶ島食事日誌」を拜見して、本當であることを知りました。同書は或る篤志な青年の、同島一ヶ年間の毎日の食物の日記であり

ますが、それを見ると、島では晴の日も雨の日も蘇鐵の粥を炊いて食べてゐます。晴の日にはそれへ豚肉等が餘分に添へられて、小さい人達もよろこんで食べてゐますが、米の飯は殆どなく、稀に食べたと記錄してゐる米の飯と粟の飯などは、大方島の上流家庭らしい著者の家で饗應された日であるのは注意されるのでございます。

又、文政、天保あたりまでの琉球の記事を收めたもので、「南島雜話」といふ古い本にも、「農夫蘇鐵を食に製する圖」といふ處があつて、それには女達が其作業をしてゐる繪があり、斯様な說明が附してあります。

○蘇鐵の皮を去り大切にする圖

○蘇鐵七日水に漬置いて後土地イキを付る圖

○大切の蘇鐵を河に漬け毒氣を去る圖

○日に當て後臼にて搗く圖

此様に克明に掲げてありまして、製法の手數なことを偲ばせてゐます。

岩倉氏の食事日誌の中には、其蘇鐵粥や團子の調理法に就いて、其筆記者は、祖母の作るのは母や妹達より上手でうまいと、讃美したり、祖母は蘇鐵の製法では技術が優れてゐると、ほめてゐるのもゆかしいことですが、斯うした蘇鐵の調製法の上手なのは、主婦と

して一番の誇りであるらしく感じられました。

三

又、日本で一番高いと聞く飛騨の高山、白川の山村では、今も尚稗ばかり食べてゐるといふことですが、江馬三枝子女史の報告によれば「略。稗ばかり食べれば上々、現在では馬も食はぬと云ふ稗糠との混食、稗糠の味噌、稗糠のダンゴ等の常食だつた……」といふことでございます。稗の歴史を調べるならば、全國到る處に資料も殘つてゐることでございませうが、白川村と同じやうに、東北地方の畑地帶の山村では、今も昔と變らぬ處が多いかと思はれます。わけても山國の岩手縣などでは廣く行はれてゐるらしく、紫波郡の山村で小學校の生徒の携へて行く辨當は、殆ど一色の稗で、袋に入れて腰に下げて行く中に、冷えて元の粒に還つてしまふので、

拳を以て米でも摑むやうにして食べる、と早川孝太郎氏著「稗と民俗」の中に見えてゐます。又同縣の九戸郡安家村の小學生徒も、稗に小豆を混ぜて、黒い飯を辨當にしてゐた、と同書にありました。

私の祖母も岩手縣の生れでありましたが、祖母の話として傳へられてゐることには、九戸郡の久慈、輕米、江刈、葛巻、伊保内地方は、昔は有名な山村僻地として知られてゐたと申しますが、此地方では栗飯と謂へば、栗一色の飯で、又小豆飯と謂へば、小豆一色を煮込んだものだと謂ふことでした。田の無い此地方では、嫁婿をやる場合にも、椹の木山を持たぬ者には呉れるな、といふ諺さへあつたと申します。斯様な土地では主に稗が常食で、その他に栗や小豆を食べ、尚それでも食物が不足で、木の實を食べなければならなかつたさうでございます。椹は勿論野生ですが、栗も亦柴栗などと稱せられてゐるのは野生であらうと想像してゐます。あの大

粒の栗のなる大木は、何時頃東北へ移植されたものか知りませんが、其等の栗を採取して食糧とした村々の人達が、屢々襲來する饑饉にどれ程助かつたかが、古老の談を聞いてしみ〴〵感ずることがございます。

今ならば、田舍できへ一升何十錢もして、既に代用食の域を脫してゐますが、明治の初め頃までは栗は澤山食べられてゐました。茹で栗にして脫皮し、それを搗いて味噌のやうにしたものを握つて、辨當代りに山野へ携へたといふことであります。橅の實は東京邊ではドングリと稱せられてゐますが、東北では大抵シダミと申します。是も多量に採取調製して餅にするまでは、南島の蘇鐵のそれに似て、可成り手數がかかります。是が卽ち自給自足經濟時代からの一續きの村の生活で、是を赤文化の低い食料として卑下するならば、日本の國で白いお米をいくら作つても足りるわけがないと思ひます。同じく江馬さんのお書きになつてゐることですが、飛驒の山村では、此木の實を一軒で七八俵から十俵も採取貯藏して置いて食べてゐるとありました。又筑後平野のやうに、田ばかりで焚く燃料にも事缺いてゐるやうな米の國もありますが、決してそんな土地ばかりあるわけではなく、日本の國の大半は今日でも米ばかりを常食としてゐるものではないのでございます。

四

群馬縣碓氷郡の後閑村で、配給米の行はれた後の話でございます。一人前の配給量は甲乙に分れ、何合づつとかの割合になつたさうですが、をかしなことには其量が多いといつて受けない農家が澤山出て來たといふことです。此地方は、徹底した組合組織のもとに生活してゐる農村であるだけに、米は組合の管理に委ねて各自の貯藏はないといふことであります。それで必要の時だけ組合から出して來るといふ

ことで、それが平均して一人當り一合位にしかならないといふことでした。考へて見れば分ることでせうが、勞働の勞働で、一合の米は老人子供の食にも足りる道理がありません。都會の人なら大騒ぎをするのでございませう。しかし、村の人達は昔乍ら斯うした生活をして來てゐるのであります。それは、此村も謂はゞ米が常食でも主食でもない處だからであります。もう少し詳しく申上げるならば、此地方は山附きの土地で高い關係もありませうが、山林が一番多く、畑はそれに次ぎ、田は尠いといふことであります。さうして其田も亦三分の一は他所者の所有で、三分の一は土地の地主階級に屬し、後の殘りは土地の農家の所有になつてゐると申します。從つて自作農が少なく小作の方が多いさうです。尤もそれは此地方ばかりでなく各地とも同じやうな現象と申してよいかも知れませんが、それにしても後閑地方は米の產出に比して消費の量が僅少と申します。畑地の多い處だけに雜穀の方の

收穫が多く、最近は主に小麥を栽培して主食とし、朝は米に雜穀を二三種も混じて食べ、晝と夕食は小麥粉を主に食べるといふことであります。

農家は何處でも米を不斷に食べてはゐません。米ばかり食べられる農家は、日本の南にも北にも、少し位はあるやうでございますが、幸か不幸か、それは又薪木もなく野菜にも事缺いてゐる。筑紫平野や、津輕平野の、田ばかりある土地の農家ではないかと思ふのでございます。九州では筑後地方の人達は薪木の代りに葉を焚き、山の多い肥後の村々に來て、圍爐裡の澤山の焚火を見ては、肥後はこんな焚火があるからと羨んでゐるのであります。肥後閑村地方は雜穀の他に甘藷の栽培が多く、食料の一つとして大きな役割を果してゐることは、九州や南島とも同じやうでありました。

一　五

米はもと南の國から渡つたものと謂はれてゐますが、今では既に北海道の寒い原野にまで持運ばれて、人々の命の糧となつてゐます。又甘藷が、青木昆陽先生に依つて琉球から移植され、本土の荒野を沃したことは、常民に取つて深大な恩惠でありました。それが北の果てまでも運ばれて栽培せられ、今では子供の間食の役目をするまでに、栽培の技術も進んで來てゐます。以前青森縣の戸來村や十和田地方も、主食は稗でありましたが、最近では餘り食べなくなりました。南の方の豐饒な土地に住んでゐる人達は、七十歳の老人ですら稗の實を知つてゐません。農業の進歩につれて、態ては稗粟も追々に委を消す日が來るかも知れませんが、それでもまだ北は勿論のこと、南の各地に栽培せられて居り、殊に熊本縣の阿蘇の奥地や五箇莊あ

たりでは盛んに作られてゐるときゝます。さうして斯んな時勢になれば、稗などの需用も多くなつて來て、これからは、増産して農家も亦もと通り食べねばならぬやうになりませう。

北の國の農家で、米の一粒も入れずに炊く粟の飯も、又稗糠を入れて炊く稗飯も、私はよく知つてゐます。是等の飯は冷えれば粘氣がなくなりますから味噌汁をかけて食べるといふことも知つてゐます。飯に又干葉や大根、蕪などを混じて炊くのも決して稀ではありません。私はそれが必ずしも饑饉時の食物だとは思つてゐません。何故ならば、それは農家一般の風で、時に觸れては彼の人達が臨機應變に作るのでありました。それをカギヨウするといふのは、家の經濟をするといふことでありますが、何處の農家でも、穫つた作物を斯うして食べないわけにはいかないのです。ですから、農家の是等の食物を、早計に饑饉食

と謂ふことも私は躊躇しますが、代用食といふのも新しい言葉で、村々では常の食物に他ならないことかと思ひます。

粟や稗に次いで食べるのは蕎麦で、小麦も夏から冬にかけて用ゐられる食物ではありますが、どういふ關係か北の國は、南の國の方よりは蕎麦の收穫が多いらしく、殆ど蕎麦ばかり食べてゐます。家に客でもあれば、女達は蕎麦をひいて粉を作り、ハットやカッケモチの馳走をするのが常であります。ハットとは手打ちの麺類のことで、子供達はズルコと申します。是は人を歡待する時の料理で、常には餘り作りません。カッケモチは寒い間は好まれる食物で、蕎麦粉をしめして餅とし、三角形に程よく作り、それを薄く切り熱湯の中に入れて煮るもので、それに葱味噌をつけて食べます。又蕎麦團子と謂つて、中に小豆の餡を入れたり、串餅と謂つて、茶托大の餅に作つて、煮てから砂糖味噌やじゆうね（えごま）味噌をつけて燒いて食べます。是は蕎麦粉を熱湯でしめして大きな餅を作り、大抵一升の粉を二つか三つにしますが、それを圍爐裡の赤灰の中に入れて燒いたものです。餅の中には適當に鹽や味噌を入れます。

此他に、蕎麦粉ではテコスリダンゴといふものがあります。是を又トッテナゲとも、柳葉とも申しまして、丁度川楊（かはやなぎ）の葉のやうな恰好に作つて、味噌汁の中に入れ、干葉の煮た物を入れて食べました。

小麦粉も、團子や餅類に大變用ゐられてゐますが、ツミリとかヒツミとか謂つて、東京のすいとんみたいなものが特に好まれて日常料理されます。小麦粉の餅に砂糖味噌を中に入れ、半月形に作つて煮たものをセナカアテ（盛岡地方）又はキンカ餅（五戸地方）と謂ひますが、是は盆の精靈迎りには、是非なくてはならないも

のであります。

六

九州地方でも、農家では雑穀や甘藷を主に食べて、米は食べない様にする風がありました。肥後の南關といふ處に私の知つてゐる農家がありますが、此家は部落で一番の裕福な家庭で、俵を百俵位も積む程の家計ではありましたが、それでも毎朝カライモ(甘藷)を茹でて食事としてゐましたし、飯にも麥や粟の他に矢張甘藷も混じて食べてゐました。さうして時折り變つた日に作る團子餅は屑米で、決して良い米を用ゐることはありませんでした。さうでないと小麥粉の黒い饅頭の類でありません。そんな工合で、十人以上の家族でありましたが、米は月に一俵は食べなかつたやうであります。又此地方は甘藷の產地でありますから、甘いいもの料理がありました。團子汁といつて、甘藷を入れた味噌汁の中に、小麥粉の團子を入れたものもあり、カライモ團子と謂つて、小麥粉の餅で甘藷を包んで蒸したものも、おいしく食べられました。それだから此甘藷の貯藏が澤山で、いも釜と謂つて地下を掘つた中に、來年の新藷の出來る頃まであるやうに、家々ではいくつもあるいも釜の中に入れて貯藏して置きます。斯うしてなるべく白米は食べないやうにし、作つた良米は賣つて家計を立てゝゐるのでありました。都會に於て消費ばかりしてゐる人達が、よいものよいものと品質の上等なものを要求するのとは異つて、生產する農家では、なるべく屑米や雜穀を食べて、少しでも白米は貯藏しようとつとめてゐます。

又同じ南關の一農家では、兩親と夫婦と子供二人の六人の家族で、其中、老父一人は別鍋の白飯を食べ、後の家族達は雜穀や甘藷が主になつてゐるらしく、其家の主人の話では、「それでも年に四俵半の白米を食べますから、この部落では米を食べる

方に入るでせう」といふことであります。肥後は昔から米の國、殊に南關地方は一等米も相當に産出する土地であります。併し、同じ熊本縣でも南部の球磨郡にある春邊川は、多分人吉町あたりであの有名な球磨川と合流する川と思つてゐますが、水勢の豊かな水の美しい川であります。其上流の五木村は、同縣の宇土郡よりも大きい村だと申します。此村は山嶽ばかり多くて、田も畑も餘りないやうな處であります。私は過ぐる昭和九年の初夏の候に、此五木村の頭地といふ部落を訪づれたことがあります。此處は日本で有名な五箇莊とは、丁度山一重隔てた村で、東北あたりにはあまり見なれない、切立つた山と山とに挟まれた處で、夜も明けがたい處と謂はれてゐますが、そんな地形ですから畑は切畑や燒畑が多く、山のてつぺんまで切り開いて、急傾斜な畑に麥などを作つてゐました。田などは殆ど稀にしかなく、部落民の常食はさつまいもと雜穀ばかりであつたと申します。最近水力電氣が起さ

れ、山には至る處隧道が通され引水して以來、水の便がよくなつて、追々と水田が起されて來たといふことであります。此處で私の會つた農家の主人は、五十がらみの人でありましたが、斯んな話をしてゐました。

私も今起してゐる田が出來上れば、八畝位の田を持ちますから、事の米には困りません、と。事とは神を祀る日のことで、常の日とは違ふのでありました。此農夫の起してゐる田といふのは、石だらけな土地で、家族三四人で鍬を使ひながら石を拾つてゐましたが、八畝の田も三年間は無償ださうで、其後は小作になるといふことであります。其上、此樣な山間部では、交通も不便で米の輸入も出來ないから、事の以外には、さう無暗に白米を食べられないことでせう。田無しの村々の農家は北から南まで斯うした生活をして居ります。もとより經濟的にも、さうせぬと生計が立たぬのであります。その爲に村々には昔から米を大切にする風があつて、南の

米の國、肥後ですらもまことに敬虔なものがありました。前記南關地方に於て、春秋の地藏祭りの日に、又晴の田植の日に畦などに立つて、「今日は、白飯だぞ！」と我が子を呼ぶ親達の聲に集る兒等の歡喜は、何となく米のなかつた時代の、遠い昔の先祖達のよろこびを見るやうな思ひが致しました。

村々の常食は今も尙白米ばかりではありません。一色の白米を常食としてゐるのは直接生産に携つてゐない都會生活をする人達のことでありました。最近は各地とも米が不斷の食事になり、又交通其他の關係で村の生活にも幾分の變革が行はれたことでせうが、それでも農家は雜穀を食べずには生計が立たないのでございます。そればかりでなく、彼等の意識には、經濟以上に米の神聖さの根强い傳統が流れてゐるのでございます。

農村採訪記(一)

一、澤田村

此採訪記は、昭和十四年の秋の半ばのことです。澤田村は、十和田湖を水源とする奥入瀬川の上流にある部落で、上北郡十和田村の大字であります。此處は八甲田の連峯が手に取るやうに近く、壯麗な山の姿に氣を奪はれさうです。

此地方は、昔は所謂ノダイ(野借)と稱された田無しの土地で、常食はつい最近まで稗、粟、蕎麥ばかりでしたが、近年大規模な灌漑工事が竣工しましてから、廣大

な地域が水田に起され、今日では米の産出額も多く、三本木米として縣外に移出されるやうになりました。以前はエキ(交易)が、五戸又は遠く七戸との間に行はれて居つたのですが、交通經濟に伴ふ三本木町の發展につれて、今は自然此方に移りました。

此村は、八甲田山のツレ(連)又はツリと稱せられて、可成りの高原であり乍ら、氣象の關係で霜の降りない處だと云ひます。既に里の村々では、菊も茄子も霜に傷められて茹でたやうに枯れて居りましたが、山根の此村では菊も美しく開花し、茄子も黒々と生つて居ました。豊かに流れる灌漑用水は村を縦横に貫通して、家々の前には、みな洗場が作られてあります。併し飲料水には乏しいと見えて、女達が遠い井戸から擔いで運んで來て居りました。

私の訪れた農家は、常の口(家敷の入口)を堰水が通り、前庭も廣くはありません家は南向の新築で、見た感じは此邊の中流農家のやうでした。堰の傍には大桶が置かれ、雪のやうに白いカヌカといふ茸がその中に一杯水漬にされてありました。家の前では家族達が稗打ちの最中でしたが、其の側で赤犬と三毛猫が一緒に寢て居ました。入口の敷居框には、『萬世欽忠烈』と書かれた小さな木札が一枚掛けられてあつて、見る者に異常な感動を惹起しました。聞けば、此四月に、此家の入營中の長男が滿洲で匪賊の爲に戰死したのださうです。まだ遺骨も到着せず、家の祭壇には、上等兵の軍服姿の若い息子の寫眞と、唯一つ殘されたといふ腕時計とが飾られ、鉢にも盛らぬあけびと山葡萄が淋しく供へられてありました。私も持參の赤い林檎をそこに添へて靈前に額きました。

家人も大變喜んでくれました。此家の今年七十八になる老爺が、私にいろ〳〵のことを尋ねました。佛間に竝べられた部隊長以下戰友達から送られた弔旗を指して、

役場から來る人も町から來る人も、一人として讀んで呉れる人がない、「譯」を聽かして呉れと云ふのです。又どうして私方の孫ばかり死んだのだらうかなど、世間のことを何一つ知らぬ此爺が、私の質問より先に、私から世間話を聽きたいのでした。丁度秋の招魂祭で、東京では、長くも　聖上陛下が靖國神社に御親拜遊ばされに聖日でありましたから、私はそれこれとなく話をしました。老爺は「始めてわかつた」、と謂つて喜びましたが、私は言ひやうもなく腦のせまるのを感じました。老爺は又思ひ出して、孫に新築した此家を一度も見せなかつたことゝ、歸還してから嫁を取るつもりであつたのが、嫁を取らずに死なしたことが申譯がない、それを思ふといゝとしくてと老いの目からはら〳〵と涙を流しました。せつない述懷を聽くのも亦いとしいものでした。それだから今年入營するといふ次男には、嫁を取つてからやるといつて、四、五日の中に婚禮があるといふことでした。

東北地方の農家では一般に茶を飲まないのが普通ですが、此家には粗末乍らも新しい茶道具が備へてあつて、直ぐ私達に茶を淹れて勸めて呉れました。戰死者を出してからは、縣知事始め各方面からの訪問客が多いといふことでしたが、御茶が用意されてあるのも其の爲かと思はれました。茶受けに山葡萄を出して勸められましたが、今では子供の頃のやうには食べられません。その上葡萄には蠅が澤山集つて香を立てるのが氣になりました。晝食には白飯を炊いて、茄子の味噌汁と白菜の漬物を菜にして秋田膳へつけて出しました。汁には煮干鰯が入れてあります。煮干は在方では臨時の客用の品で、これに鹽引でもあれば旦那衆の御馳走です。秋田膳は隣縣の秋田方面からでも來るのでせう。春慶塗に似た極粗末な塗物で、普通の膳よりは幾分小さ目のものです。箸は篠竹を切つたもので、それを添へて出すのでした。子供の時分、在方へ參りますと、斯うして出して呉れるのが、町方で見慣れない爲

に穏いやうに見えて困つたものでした。今はもう、箸の方は塗箸に變つて居ります。

私達に相伴して呉れた老爺が、もう一週間ばかり前だと生鰯があつたのだが、と、鰯の馳走の出來なかつたことを悔んで居りました。私は、此山奥で生鰯を味ひ兼ねたのも幾分慊みでありましたけれど、それにも況して心殘りであつたのは、あの澤山の茸でした。後での話ですが、茸は町の人に食べさせて若し腹でも病まれては大變だと云ふので出さなかつたのださうです。それを又歸りに貰つて來なかつたのも、無用の遠慮だと笑はれもしました。

老爺は割合に記憶もよく、話好きで、二三日泊つて行けと言つてくれました。靜かで風景のよい此村を褒めたら、爺は、澤田は良い處で金が溜るから來いとも言つて呉れました。素朴な言葉を聞くのも嬉しいことでした。アヤ(當主)は今日、此間山で見て置いたといふ葡萄を採取に行つたとかで不在でした。明日は戰死者の遺族達が

縣知事の招待を受けて出席するといふことでした。爺は聳える八甲田を指して、あれを横切つて行けば青森は直ぐだ、と事もなげに言ふのでした。澤田からは七八里あるさうですが、それでも山の人達には朝普通に發つて晝過ぎには樂に出られるといひます。今日採取する葡萄も多分は其序に賣ぐのでせう。歸りは鐵道で古間木まで汽車に乘り、それから輕便で三本木に出て、更にバスで相阪に來て、其處から又二里半徒歩だといひますが、其方は却つて時間がかゝるとのことです。私達は午後三時過ぎ辭去して家を出ました。澄み渡る秋空には、天高く八甲田、戸來の諸峯が夕日に美しく映えて居ました。歸路は坦々として眞直です。一丁ばかり行き過ぎてから振り向きますと、見送りに出て呉れた爺婆と嫁の三人がまだ常の口に立つて居りました。爺は後手をして、女達二人は兩手を組んだのを前掛けに包んで。

二、豐川村

五戸から三戸行きのバスに乗つて南下すること十分、此處で車を降りれば三戸郡淺田村大字淺水の村に着きます。淺水は昔ねのばさまの居た處だと言ひ傳へられて居ります。所謂、諸國に多い安達原、淺茅原などの一つ家、石の枕と同系の傳說の土着してゐる處で、眞澄の遊覽記其他の書にも見えて居ります。鄕土研究二ノ十に掲げられた細語の橋の論文の中に

は此淺田の淺水村に因む朝不見の橋に注意せられ、文獻など多く掲げて、朝六の橋、夢不見橋、面影橋等の由來と、細語の橋、囁語の橋、密語の橋に到る關聯を說かれ以前此等の橋の上で下級巫覡の輩が行人の言語を聽いて、朝占夕占とも謂つた宵曉の時刻に行ふ占の風習のあつたのが、後には傳說を生み、既に存してゐた古風な橋の神の信仰と結びついて、それが後世の誤解を生ずるに至つて、思ひ〳〵に進展しつゝ土着したものだらう、と謂ふやうに說かれて居ります。淺田村淺水は五戸の町の人爲的な發生とは變つて、古くから往還の要路であつた爲に自然に發生した所らしく、五戸などよりは二百年も古い村だと謂はれて居ります。淺水は單に漢字音から來た命名と私などは思ひ込んで居りましたら、今見る川の水は水勢豐かに、可成り急な流れで、下流では大川の馬淵川と合流して居ります。謂はれの土着するには必ず相當の要素があつたのです。同村淺水の寺には、和尙に飼はれた狸の報恩譚で、

狸が和尚に一ノ谷合戦を演じて見せたといふ寺もあり、山一つ越えれば怪賊事作の住んだといふ柏木の里があります。斯うした地形と環境はねのばさまのゆかりを忍ぶにも亦相應しいものです。朝不見橋を淺はかな知識でかたづけたのは、かなしい極みです。バスから降りて意外に道草を食ひましたが、私の行程は、實は淺水の村には入らず、橋の手前を右曲して坂道を西へ、一里、同村大字豊川に向ふのでありました。豊川村は昔から、五戸町に於て行はれる年中行事の小正月のえんぶりや、又九月の豊年祭に參加する慣例を持つてゐる部落で、殊に小正月に演ぜられる地狂言の上手として知られて居る村であります。私が此村を訪づれる氣になつたのは他に理由があつたからです。實て、五戸に於て昔話を多量に採集した傳承者の、新井山りせ女が、此處の出であつたのと、今亦同伴した、とわ女は其姪で、此村では有數な豊田家の一族の人々であつた緣故からでもあつたのです。とわ女の實家は今は荷

輕井に移り、屋敷跡はみな畠となつて居ました。叔父といふ人の家に、同伴のとわ女は案内して呉れました。天氣がよく、暖かで、家の圍りには粟を立てゝ乾してありましたし、家のニハ（作業場）では大勢で粟落しをして居りました。此作業は以前は穗を一つ一つ切つて、更にそれを打棒で打つて落したものですが、今此處では粟束のまゝ粒落しの機械にかけて、見る間にばら〳〵と落されて居ります。何倍の能率でせうか。粒落機はカラハシの昔から、センコキ（他地方ではセンバ）に移つて幾何も無い年月でせうが、もうカラハシの名は忘れられ、八十になる老人等までがたゞ竹の棒とだけ記憶し、それは帚草の實を扱く場合だけに使ふものだとばかり思つて居ます。農具の變遷も時代と共に進んで、古いものは不用になり、記憶から遠ざかつて行くのです。此家に今日の粟打ちの手傳に來たといふ若い夫婦の人達は、峠を越えた一里半向ふの部落の人だといふことでした。